

[資 料 1]

2025年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫

目次

事業目的	1
事業項目	1
概要	2
研究事業の全体構想	2
2024-2026 年度の特定奨励費による研究事業の目的	2
研究事業の効果	4
研究事業の実施体制	6
公的研究費の管理・監査にかかわる体制強化	7
特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」	8
特定奨励費により実施する事業と、その他の研究費等により実施する事業	11
I. アジア基礎資料研究と重点事業 4 項目	13
(1) アジア基礎資料研究: 研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進	15
(2) 総合的アジア研究データベース: 国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築 ..	22
(3) 資料研究成果の発信: 国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動	30
(4) 若手研究者の育成: 海外機関との学術交流の支援強化	34
II. 資料収集・整理	40
A. 資料購入	40
B. 資料交換	41
C. 図書・資料データ入力	41
D. 資料保存整理	42
III. 資料研究成果発信	43
A. 定期出版物刊行	43
B. 論叢等出版	43
IV. 普及活動	44
A. 研究情報普及	45
B. データベース公開	56
C. 海外交流	56
V. 学術情報提供	57
A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス	57
B. 研究資料複写サービス	58
C. 情報提供サービス	58
D. 展示	58
E. 普及広報	59
F. 国際交流	61
H. 研究者の交流および便宜供与のサービス	61
2025 年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書	65
A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業	65
B. 三菱財団研究助成による事業	66

2025年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫

理事長 宮 永 俊 一

2025年4月1日～2026年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業の概要は下記の通りです。

事 業 目 的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

事 業 項 目

概 要	2
I アジア基礎資料研究	13
II 資料収集・整理	40
III 資料研究成果発信	43
IV 普及活動	44
V 学術情報提供	57

概 要

研究事業の全体構想

東洋文庫は、貴重書 1,100 点余を含む欧文図書資料からなるモリソン (G. E. Morrison) コレクション、ならびに和漢の貴重古典籍からなる岩崎文庫を中核として、1924 年、岩崎久彌によって、アジアに関する貴重図書資料を備えた民間の研究図書館として創設された。以後 100 年にわたり、学術上価値の高いアジア諸地域の現地語資料を継続的・系統的に収集し、100 万冊を超える蔵書を散逸させることなく保存・管理し、内外の研究者の利用に供してきた。

研究事業の長期的な目的は、アジア現地語資料の収集・整理、貴重図書資料の保存・管理、および公開を継続するとともに、これらの資料に基づくアジア基礎資料研究を推進して、世界のアジア研究の進展に貢献することにある。このような研究事業を 290 名に及ぶ研究員を擁して推進する民間の研究図書館は、世界的に見ても稀である。東洋文庫が 100 年にわたって蓄積してきた特色あるアジア研究を中断させることなく継承し、資料のデジタル化と保存管理を基軸に据え、次の 100 年に向けて発展させていくことは、国内外のアジア研究者が切望するところである。

2024-2026 年度の特定期間による研究事業の目的

東洋文庫は、2024 年に創立 100 周年を迎える。これを機に、創設者である岩崎久彌の想い、すなわち貴重図書資料を研究者に自由に閲覧させ、東洋学の深化に貢献するとの考えに立ち帰り、その精神を東洋文庫の各事業に反映させていくことを中期的な目標に据えている。その第一歩として、過去 100 年間に収集した資料、蓄積した専門知識・研究成果等を次世代に継承し、さらに発展させていくため、いかにその土台作りを行っていくかが喫緊の課題となっている。

そこで 2024-2026 年度では、「研究データベースの発展と継承：研究データの国際規格化の推進と保存管理の恒久化を目指して」を中心テーマに据え、下記の 4 つの研究事業に重点的に取り組む。

(1) アジア基礎資料研究：研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進	pp. 15-21
(2) 総合的アジア研究データベース：国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築	pp. 22-30
(3) 資料研究成果の発信：国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動	pp. 30-33
(4) 若手研究者の育成：海外機関との学術交流の支援強化	pp. 33-39

これらの研究事業は、個人や複数の研究者が競争的研究費等を活用して行うような短期集中的な研究ではなく、東洋文庫が所蔵するアジアに関する貴重図書資料、現地語資料を対象とした日常的・継続的な基礎資料研究の伝統に根ざすものであり、その維持・継承と研究成果の発信に対する国内外の研究者・関連学界の期待は大きい。そこで東洋文庫では、蔵書の保存・管理・修復、および関連資料の収集に日常的・継続的に取り組み広く公開するとともに、若手・現役および現役を退いた名誉教授クラスの研究者など、世代的にもバラエティーに富んだ研究員がそれぞれの専門分野を活かして、これら蔵書を研究対象とした基礎資料研

究に共同して取り組み、次世代の研究者を育成しつつ、その専門知識・研究成果等を国内外に発信してきた。

東洋文庫では、近年、情報学の専門家の協力を得て研究データベースの国際規格化を推進しており、その成果がデータベースの公開という形で現れ始めている。2024-2026年度はデジタル化の推進だけでなく、デジタルデータを消失させることなく次世代に継承するため、過去に蓄積したデジタルデータの恒久的な保存体制の構築にも重点的に取り組むこととした。

研究成果の発信方法には、研究データベースのほか、国際シンポジウム・ワークショップ等の開催、出版物の刊行、東洋文庫リポジトリ ERNEST による電子的公開等の方法があり、これまで以上にその連動性を高め、発信力を強化する。これらの活動の中で若手研究者を育成し、とくに海外機関との学術交流の支援を強化することで、東洋文庫の特色ある研究を中断させることなく、最新の専門知識を獲得・蓄積して次世代に継承し、海外に発信して、東洋学のさらなる発展を目指す。

以上は、東洋文庫が学術研究団体として研究・図書・普及展示の各部が連携して実施している事業であり、特定奨励費を活用して実施するのにふさわしい事業であると考ええる。

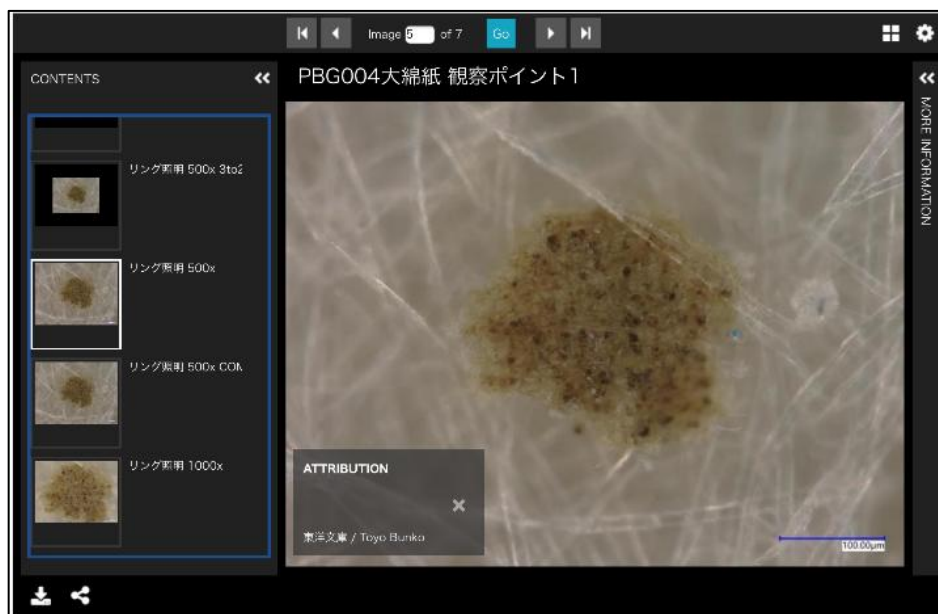
研究事業の効果

本研究事業は、東洋文庫が研究図書館として取り組むアジアに関する資料の総合的研究であり、基礎資料研究、資料収集・整理、成果発信、普及活動の 4 つの研究項目を立てて推進している。とくに 2016 年度からは、5 つの重点事業（アジア基礎資料研究、総合的アジア研究データベースの構築、国際発信・国際交流の推進、研究成果の刊行・発信の強化、若手研究者の育成）を設定して、3 期（第 1 期：2015-2017 年度、第 2 期：2018-2020 年度、第 3 期：2021-2023 年度）にわたって研究活動に取り組んできた。

2024 年度は新たなスタートラインとして、「研究データベースの発展と継承：研究データの国際規格化の推進と保存管理の恒久化を目指して」を中心テーマに掲げ（pp.2-3「2024-2026 年度の特定奨励費による研究事業の目的」を参照）、研究データベースを主軸に据えている。その目的は研究データベースを構築すること自体にあるのではなく、前 3 期に蓄積された経験と研究成果を土台に、若手研究者を育成しつつ、国際性・継承性を確保した状態で研究成果を保存管理し、国際的に情報発信する点にあり、主役はあくまでアジアの貴重図書資料に対する基礎資料研究である。そこで、紙質分析研究と、その資料保存を例に、本研究事業の当該研究分野に対する貢献度、期待される成果を記述する。

I. アジア基礎資料研究

東洋文庫は、伝統的な歴史・文化研究によって蓄積された専門知識・研究成果を土台に、総合アジア圏域研究班が各研究班と共同して、「研究環境の多様化」（pp.8-9「特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」」の「2021 年度進捗状況確認」を参照）に対応しつつ、新しい視点・発想での研究に取り組んでおり、その研究活動は、近年、学際的な広がりを示している。最も特色ある研究の一つが文理融合型の紙質分析研究であり、東洋文庫が所蔵する古今東西の貴重図書資料を対象に、精密顕微鏡を用いた調査を継続的に行っている。蓄積した画像データは IIIF 形式で保存し、分析結果をメタデータとして「紙質分析データベース」に登録する（下図）。これを書誌情報の一つとして OPAC システムと連携させ、かつ貴重図書資料の保存修復を行う際の紙料情報として活用する。



II. 資料収集・整理

資料の保存修復は、現在、モノとしての書物の保存とデジタルデータとしての保存の 2 つの側面を持っている。書物のデジタル化は、閲覧利用による書物の負担を低減し、モノとしての書物の保存にとってもプラスに働く。「紙質分析データベース」に登録された紙料に関する情報と、2021-2023 年度に構築を開始した「過去の修復記録データベース」とを複合的に活用し、書物の作成された地域、年代、素材、製本方法等に応じた最適の保存修復の方法を導き出す。なお、右図は、修復記録のほか展示記録、書誌、研究の連携データベースのプロトタイプ版の一画面。これに紙質分析データベースを連携させる予定。

展示保存修復研究連携データベース				
メニュー				
文選集注残五巻 存巻第四 十八第五十九第六十八第八 十七第一百十三				
ID: a000000000002 請求記号: 一-B-3 WEBDBID: 481753 出版事項: (平安中後期) 鈔本 形態的記述: 7冊				
展示会				
タイトル	目録内 資料記 述	展示会ID	展示開始年月日	展示終了年月日
文選 巻第四十八 (嵯峨源江記至巻末) (金澤本) 寫本 「平安朝時代の書寫」 (区部内装七寸一分) 一軸		[創立記 念展示]	1924/11/29(土) - 12:00	1924/11/30(日) - 12:00
保存修復				

III. 資料研究成果発信

東洋文庫が過去 100 年間蓄積した修復記録と、過去 3 期にわたって蓄積した紙料データは、様々な地域・年代で作成された資料を保存修復する際の最適解を導き得る。そこで、セミナー・ワークショップ等の開催や、「紙質分析データベース」と「過去の修復記録データベース」の公開を通して、東洋文庫の経験とデータを国内外の研究機関に積極的に発信する。

IV. 普及活動

これらの研究成果は、東洋学講座や東洋文庫ミュージアムでの展示等の機会を活用し、専門家だけでなく、広く一般に向けて普及する。これは紙の修復に関する知識の普及にとどまらず、ひいてはアジア研究に対する一般の関心・理解を深めることに繋がる。さらには紙とアジアの深いつながりに対する社会的な関心を喚起し、将来的なアジア研究の継承・発展に貢献することとなろう。

東洋文庫が2023-2027年度にかけて取り組む「100周年記念事業」は短期集中的、かつ大規模な活動である。これに対し、特定奨励費による事業はより長期的・経常的な活動である。100周年記念事業では、特定奨励費によって過去に蓄積してきた土台を一気に嵩上げる。特定奨励費ではこの土台にしっかりと根を張り直し、これまで以上に高いレベルで、紙質分析研究をはじめとするアジア基礎資料研究に取り組む。それによって、東洋文庫が100年間にわたって蓄積してきた特色あるアジア研究を中断させることなく継承し、資料のデジタル化と保存管理を基軸に据え、次の100年に向けて発展させていく。上記の研究事業は、国内外のアジア研究者の期待に応え、貢献するものとなると考えている。

2025年度の事業において、どのような効果があったかについては、それぞれ下記の項目で説明する。

I	アジア基礎資料研究	pp.13~39
II	資料収集・整理	pp.40~42
III	資料研究成果発信	p.43
IV	普及活動	pp.44~56

研究事業の実施体制

東洋文庫は、「定款」(<https://toyo-bunko.or.jp/wp-content/uploads/2024/03/00-2013-Teikan.pdf>)第3条・第5条に規定するとおり、「東洋に関する図書を収集し、アジア全域及び北アフリカを対象とする東洋学の研究及び普及を図り、学術・文化・芸術の振興に寄与する事」を目的とする研究図書館として、研究部・図書部・普及展示部が協同して、下記の諸事業を行う。

- (1) 図書の収集・整理・保存を行い、閲覧室の設置・運営と電子化による公開、及び蔵書複写等提供による普及

担当部署：図書部

事業計画書：II 資料収集・整理、IV 普及活動(B. データベース公開)、
V 学術情報提供(A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス、B. 研究資料複写サービス)

- (2) 東洋学の研究活動と、その為の講演会・研究会等の開催、及び研究成果の発表と有益な図書の制作・配布

担当部署：研究部

事業計画書：I アジア基礎資料研究、III 資料研究成果発信、
IV 普及活動(A. 研究情報普及)、V 学術情報提供(C. 情報提供サービス)

- (3) 図書・資料の展示とその付帯施設の運営

担当部署：普及展示部

事業計画書：IV 普及活動(A. 研究情報普及)、V 学術情報提供(D. 展示)

(4) 不特定多数への普及の為の講習会・展覧会等の開催

担当部署：研究部・図書部・普及展示部

事業計画書：Ⅳ 普及活動(A. 研究情報普及)、

Ⅴ 学術情報提供(D. 展示、E. 普及広報、F. アカデミア)

(5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

担当部署：研究部・図書部・普及展示部

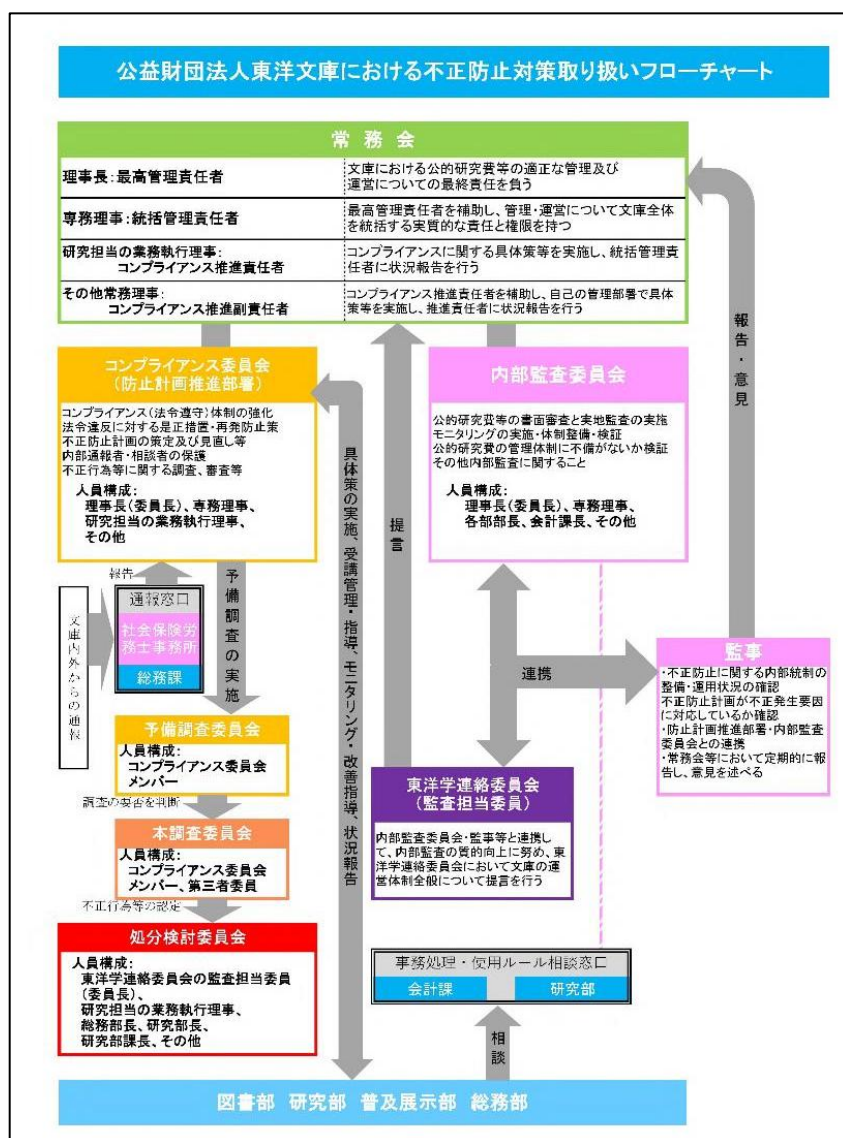
事業計画書：Ⅳ 普及活動(C. 海外交流)、

Ⅴ 学術情報提供(G. 国際交流、H. 研究者の交流および便宜供与のサービス)

公的研究費の管理・監査にかかわる体制強化

2021 年 2 月 1 日に「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」(平成 19 年 2 月 15 日文部科学大臣決定)が改正された。その趣旨および内容を踏まえ、2021 年度において、公的研究費等にかかわる不正防止に関連する規定・規約の類の全般的な見直しを行うとともに、監事との連携を強化し、さらに大学等研究機関において副学長・常務理事等の役職を経験し、機関全体の監査業務の経験がある者を東洋学連絡委員会の「監査担当委員」に任じ、内部監査委員会・監事等と連携して、内部監査の質的向上に努めるなど、より実効性のある体制整備に取り組み、ガイドライン改正への対応を一つの契機とした不正防止対策の抜本的な改革を実施した。

2022 年度以降、この体制のもと、引き続き全構成員に対するコンプライアンス教育・啓発活動を、組織の隅々まで行き渡る方法で実施して、不正を起こ



させない組織風土の形成に取り組みつつ、さらなる体制の整備・強化とそれによる実効性の確保を目指す。東洋文庫の不正防止対策の取り扱いに関するフローチャートは前頁を参照。

具体的には、年 1 回、不正防止計画・研究倫理等に関するオンライン説明会を開催し、四半期に 1 回、日本学術振興会・文部科学省が公表している不正事例を題材に独自の資料を作成して啓発活動を行っている。また、年 2 回コンプライアンス委員会を開催し、監事等からの提言をもとに計画の見直しを行っている。

特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」

2021 年度進捗状況確認

(指摘事項)

①本研究事業の目的として「(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開」が掲げられているが、「新展開」とは何を目指しているのかが曖昧なため、その内容を明確にした上で進捗状況を御説明いただきたい。

②本研究事業の目的の一つである「(5) 若手研究者の育成」の一例として、状況報告書3ページに「情報工学研究室と共同で情報学を専門とする大学院生に対して、東洋文庫のデータベース化事業に関する講習会や検討会を開催し、共通の関心を高める活動を行う」との記載があるが、具体的にどのような活動を行ったのか御説明いただきたい。

③本経費により実施する事業と、その他の研究費等により実施する事業をどのように整理しているのか御説明いただきたい。

(対応状況)

①東洋文庫のアジア基礎資料研究は 100 年の伝統の中で培われてきたが、これを墨守するだけでなく、時代の変化に応じて、常に従来の研究手法の見直しと再構築に取り組んできた。本研究事業に掲げる「(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究」における「新展開」とは、資料を取り巻く環境の変化に端を発するものである。

2020 年にハーバード・エンチン研究所と共催した国際シンポジウム「テキストとしての書物、目的としての書物—アジアとヨーロッパにおける知の生産・流通・収集」では、文献研究が内容解読だけでなく、書物の起源、素材・製作工程等その研究対象が多岐にわたることが示された。従来の文献研究では主に文字資料を扱ってきたが、近年、地図・写真・動画、資料の素材分析等を対象とした総合的な研究が求められるようになり、さらに人文情報学の進展によって、これらを複合的に活用したデータベース自体が新たな資料の形態として注目されている。このように「資料形態の多様化」に伴い、文献研究のテーマも拡大してきている。

近年、ビッグデータの迅速な分析と活用が社会的な課題となり、人文学の研究分野でも文字資料以外の多様なデータ(地図・写真・動画等)を情報学の専門家と協同してデータベース化し、これを視覚的に表現すること、すなわち「資料表現のビジュアル化」が求められている。これにより資料に対する理解度を高めて総合的な活用が可能となり、資料の比較や新たな編集が容易となる。これによって属人的な研究を超え、国内外の研究者間の共通理解を深め、研究の効率を高め、視野を広げ、一般にもわかりやすく発信できるようになる。

2022 年 4 月の個人情報保護法の改正により、研究における個人情報の取り扱いが重要な課題となっている。とくに写真や動画に含まれる肖像権に対する配慮が必要となり、「資料に付随する権利の多様化」が生じた。そこで東洋文庫では、全研究員に人権と肖像権に関するアンケートを実施し、デジタルアーカイブ学会や国立情報学研究所等が提供するガイドライン

等を参考に独自の指針を策定し、諸規程を整備した。さらに研究倫理委員会で肖像権に関する基準を説明する等、構成員の意識の向上に努めてきた。これらの措置によって研究活動において人権や肖像権を尊重し、個人情報を適切に取り扱うための枠組みを整備した。

資料の保存方法がデジタル技術の発展によりマイクロ資料から電子データに移行し、IIIF 規格の普及により情報交流が国際的に進展している。電子データの急拡大と記録媒体の劣化に対処するため「資料保存の多様化」が起こり、資料保存のために様々な技術とインフラが必要となっている。

総じてアジア基礎資料研究は、グローバル化の動きの中で、これまでの制度化や近代化等の統一的なアプローチではなく、在地化 indigenization や地方化 localization 等に焦点を当てた研究に大きな関心が寄せられ、「資料研究の多様化」が起きている。

これら資料を取り巻く環境の変化の相乗効果によって、これまでの資料調査、資料収集、資料交流、資料保存や資料研究に対して、新たな対応、つまり「新展開」が求められるようになっている。

東洋文庫が特定奨励費の研究事業で取り組むアジア基礎資料研究と研究データベースの構築は密接不可分な関係にあり、それぞれが研究の入口（発端）ともなり、出口（成果）ともなりうる。

すなわち、東洋文庫では、文字資料のみではなく、研究データベースという、デジタル化に基づく総合的な資料研究と研究表現を追求しており、そこでは文字資料や地図・写真・動画等の多様な資料形態を取り込みながら、多様な研究に資する資料研究を追求している。その成果として、すでに「東洋文庫水経注図データベース」(<https://static.toyobunko-lab.jp/suikeichuzu/>)や「東洋文庫「大明地理之図」データベース」(<https://static.toyobunko-lab.jp/daiminchiri/>)を構築・公開している。これらの作成過程において若手研究者の協力を得ることで、若手研究者が国際規格によるデータベース構築に関するノウハウを学ぶ場ともなっている。

現地研究機関との共同研究における新展開については、データベース化した資料を活用して、より系統的かつ総合的な資料活用の便宜を向上させることに努め、海外の研究グループとの共同研究に取り組んでいる。一例を挙げれば、東洋文庫所蔵の河口慧海将来のチベット写本大蔵経を対象に、ライデン大学のシルク教授、ウィーン大学のタウシャー教授の研究グループとの共同研究を進め、その成果である書誌情報と解説、参考文献を付した形で、2021年度に『宝積部』全6巻、2022年度に『華嚴部』全6巻の画像を閲覧できるデータベースを構築して一般公開した(https://app.toyobunko-lab.jp/s/manuscript_kanjur/page/home)。

今後、書誌(Toyo Bunko OPAC)、画像(Toyo Bunko Media RepositoryでのIIIF公開)、研究成果(東洋文庫リポジトリERNEST)等を連動させ、資料環境の多様化に対応するための取り組みを推進していく。

②データベースの継続的な構築・利用のためには若手研究者の育成が急務である。東洋文庫では、従来、研究員の紹介等の方法で東洋文庫の奨励研究員に任命するなどして若手研究者の育成に取り組んでいる。情報学を専門としながらも人文学の素養を持つ若手人材の育成については、研究データベースの構築に協力いただいている研究協力者等を通じて、継続的に人材を探し求めている。

その一環として、情報学を専門とする大学院生等にも広く参加を呼びかけて、毎年度、研究データベース会議を開催している。2021年度は東洋文庫で研究データベースの構築に携わる研究員・研究協力者による報告を行い、2022年度は研究図書館のデータベースの重要要素である「画像」「テキスト」「検索システム」の課題に取り組む研究員・研究協力者による

報告を行った。会議には内外の大学等研究機関でデータベースの構築に携わる研究者の参加を得、今後の研究データベースの拡充・発展にとって有益な提言等を得、若手研究者にとっても貴重な機会となった。東洋文庫には過去 100 年にわたって蓄積された多種多様な研究データがあり、情報学を専門とする若手研究者がこれらを素材として活用して、データベース構築の経験を積む場としても門戸を開いている。

その他、国内では国立国会図書館関西館、海外ではハーバード・エンチン研究所等と所蔵資料のデジタル化・データベース化にかかわるワークショップ・研究会等を共催したり、研究データベースの構築の際に若手研究者の参加を積極的に促し、技術の習得・ノウハウの伝承につとめるなど、あらゆる場面を活用して人材育成を図っている。

③東洋文庫では、特定奨励費と他の研究費の使途を明確に区別し、特定奨励費ではアジア各地域に関する着実かつ基礎的な資料研究をさらに深化させていく持続的な研究活動に使用しており、その成果である研究データベースの作成、成果物の刊行、資料の収集・保存・公開等に取り組んでいる。その他の研究費等（科学研究費等の競争的資金、各財団助成金、寄付金等）では個々の研究者が自由な発想に基づいて、特定奨励費では取り扱っていない初期段階の研究や特定の研究課題に取り組むために使用している。研究部執行部の責任において、研究員個人や研究グループに対して、上記の方針を周知徹底し、特定奨励費とその他の研究費等との棲み分けの厳格化に努めている。

2022 年度進捗状況確認

（指摘事項）

事業目的（1）にある「現地研究機関との共同研究の新展開」について、どの現地機関と、どのような内容で研究が新展開されているかの説明については、個別事例は記載されているが、全体としての件数や対象機関を包括的に整理して示すなど、改善の余地がある。また、事業目的（5）にある「若手研究者の育成」の成果についても、研究者として自立できた人数を示す等、より明確に成果を示すことが望ましい。

（対応状況）

①事業目的（1）の「現地研究機関との共同研究の新展開」について、研究班別の対象機関を一覧表化すると、下記のとおり。

研究班	2021年度	2022年度	2023年度
総合アジア圏域	Harvard Yenching Institute	Harvard Yenching Institute	Harvard Yenching Institute
	St Anne's College, Oxford	St Anne's College, Oxford	St Anne's College, Oxford
	中央研究院近代史研究所	中央研究院近代史研究所	中央研究院近代史研究所
	フランス極東学院	フランス極東学院	フランス極東学院
現代中国研究班	華東師範大学中国当代史研究中心	華東師範大学中国当代史研究中心	華東師範大学中国当代史研究中心
	上海国際問題研究院	—	中国社会科学院
	—	—	University of Cambridge
東北アジア研究班	吉林師範大学満学研究院	吉林師範大学満学研究院*1	中央民族大学歴史文化学院*2
中央アジア研究班	IOM RAS*3	—	—
	国際テュルク・アカデミー	国際テュルク・アカデミー	国際テュルク・アカデミー
チベット研究班	Universiteit Leiden*4	Universiteit Leiden*4	Universiteit Leiden*4
	Universität Wien*4	Universität Wien*4	Universität Wien*4
	—	—	British Library
東南アジア研究班	ベトナム社会科学院漢喃研究所	ベトナム社会科学院漢喃研究所	ベトナム社会科学院漢喃研究所
西アジア研究班	—	ボン大学奴隷・従属研究センター	フランス国立科学研究センター等*5
東アジア資料研究班	中央研究院歴史語言研究所	中央研究院歴史語言研究所	中央研究院歴史語言研究所
合計（件）	13	12	15

*1 2022 年度、先方の組織改編のため、満学（とくに清朝史、言語学、民族学）の共同研究が停滞。

- *2 吉林師範大学満学研究院との共同研究停滞を受け、新たに清朝史研究のための協定の締結を調整中。
- *3 Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences の略。中央アジア出土ウイグル文書の共同研究を進めていたが、2021 年 12 月に先方からの一方的通達により中断。
- *4 ライデン大学シルク教授の研究チーム (Open Philosophy)、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループとの「河ロ慧海請来写本大蔵經」の共同研究。
- *5 文書資料のデータベース化にもとづく比較制度研究において、フランス国立科学研究センター (CNRS) の他、トルコの Research Centre For Islamic History, Art and Culture (IRCICA)、国立シンガポール大学、ウズベキスタン科学アカデミー等の研究者との連携を計画。

なお、2021 年度・2022 年度においては、この他にも海外研究機関との共同研究を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大のため実施を見合わせたものが少なかった。2023 年度は 5 月の新型コロナウイルスの 5 類移行を受け、海外研究機関との交流が再開し始めており、研究部執行部としても各研究班の国際的な研究活動に対する支援体制を強化した。

②事業目的(5)の「若手研究者の育成」について、研究者として自立した者、および研究者としての自立に向けて支援中の者を、年度別に一覧表化すると、下記のとおり。

研究者として自立した者	2021年度	2022年度	2023年度
東洋文庫で正職員に採用した者*1	1	1	1
他の大学等研究機関で研究職に就いた者*2	1	3	2
合計 (人)	2	4	3

*1 うち 2 名は嘱託研究員、1 名は臨時職員からの採用。

*2 うち 3 名は臨時職員経験者、2 名は研究協力者、1 名は研究会参加メンバー。

研究者としての自立に向けて支援中の者	2021年度	2022年度	2023年度
嘱託研究員	5	3	2
奨励研究員	6	5	6
科研費応募者*3	(2)	(2)	(0)
科研費採択者*3	(1)	(3)	(3)
海外協定機関との交流等を支援した者*4	(0)	(1)	(1)
日本学術振興会特別研究員PD	1	1	2
合計 (人)	12	9	10

*3 2021 年度は 2 名が応募して不採択となり、他機関からの移管で 1 名を受け入れた。2022 年度は 2 名が新規採択、1 名が継続、2023 年度は 3 名が継続。

*4 槇原研究奨励金(海外協定機関での調査等のための給付型奨励金)を給付。

特定奨励費により実施する事業と、その他の研究費等により実施する事業

特定奨励費については、東洋文庫の伝統的なアジア基礎資料学を継承・発展させるため、東洋文庫が所蔵する和漢洋の古典籍の保管・修復・公開、ならびにアジア各地域に関する一次資料の継続的かつ系統的な収集・保存・公開、さらにそれらを活用した基礎的かつ長期的なアジア基礎資料研究を実行していく上で、不可欠の補助金であると考えている。

この特定奨励費が途絶えた場合、一次資料に特化した資料の収集・保存・公開、広くアジア全域を対象とした伝統的かつ組織的研究、過去の研究蓄積を活用した国内外への研究情報

発信など、東洋文庫が国内外の研究機関に対して果たしてきた重要な役割が継続できなくなり、かつ他に類似の研究機関が存在しないことから、日本、ひいては世界のアジア研究が大きく停滞しかねない。

例えば、中央アジア研究においては、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所(IOM)との協力関係・信頼関係のもと、20年間にわたり共同して、中央アジア出土のウイグル文書について、目録の編集刊行・改訂に取り組んでいる(2021年12月よりロシア側の事情により中断)。同様に、協力協定機関であるアメリカのハーバード・エンチン研究所や、台湾の中央研究院等との間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって行われる調査研究は、特定奨励費においてのみ行うことが可能である。

東洋文庫では、このように特定奨励費に基づいた持続的な研究活動を中心としつつ、研究員個人や研究グループが不定期にその他の研究費等(科学研究費など競争的資金、各財団助成金、寄付金等)を獲得している。特定奨励費とその他の研究費等との棲み分けについては、下記のように整理している。

特定奨励費では、東洋文庫が学術団体として研究員・研究班が一体となって取り組む研究事業を実施している。具体的には、アジア各地域に関する着実かつ基礎的な資料研究をさらに深化させていく研究や、その成果である研究データベースの作成、成果物の刊行、資料の収集・保存・公開に取り組んでいる。研究計画の立案、実施状況の確認・評価・見直しについては、研究班の代表者からなる研究部運営委員会で検討のうえ、外部諮問委員会である東洋学連絡委員会による審議を経るなど、常にブラッシュアップをはかっている。

その他の研究費等については、特定奨励費では取り扱っていない研究対象・研究課題や、特定奨励費の研究テーマの中から、さらに焦点を絞った研究課題について、個々の研究員が各自の自由な発想や好奇心に基づいた研究に取り組むために活用している。とくに研究の初期段階にあって不確定要素のある研究や、個別的・短期的な研究、あるいは準備段階を終えて研究の加速化・大規模化のために多量の研究費が必要な研究に対しては、その他の研究費等を活用する方針を2016年度に策定し、特定奨励費との棲み分けを実施している。

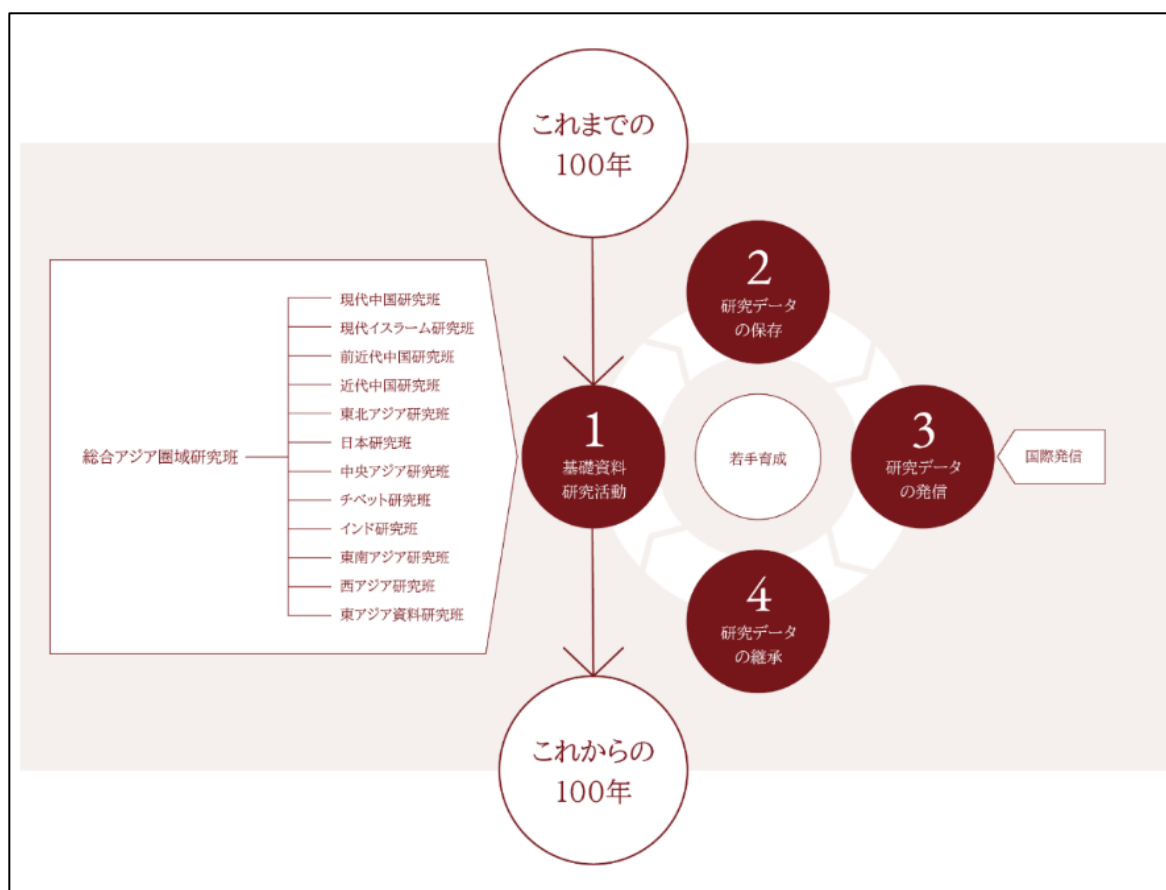
研究データベースを例にとれば、研究グループから提案された計画は、研究データベース会議における議論を参考に、研究部の研究データベース担当が内容・実施計画を吟味した上で、特定奨励費の研究計画に盛り込むべきか、その他の研究費等に応募して取り組むべきかを判断している。そこでは、上記に示すように、計画の規模、計画の熟成度、データベースの汎用性、研究部が定める「研究データベース」としての条件の達成度等を総合的に評価したうえで判断するとともに、作成過程における各段階においても到達度が検討され、大規模な研究機関とは異なる東洋文庫としての特徴ある研究データベース構築を目指している。

今後、研究部執行部の責任において、研究員個人や研究グループに対して、上記の方針をより一層周知・徹底し、特定奨励費とその他の研究費等との棲み分けの厳格化に努めていく。

I. アジア基礎資料研究と重点事業4項目

2021-2023年度の研究事業では、重点事業の第一に「アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開」を掲げ、資料を取り巻く5つの研究環境の変化、すなわち資料形態の多様化、資料表現のビジュアル化、資料に付随する権利の多様化、資料保存の多様化、資料研究の多様化、に端を発する新規事業に取り組んだ（詳細はpp.8-9「特定奨励費「進捗状況の確認結果に対する対応事項」」の「2021年度進捗状況確認」を参照）。

2024-2026年度もこれらの研究環境の多様化に対応しつつ、総合アジア圏域研究班を中心に他の研究班と連携して、従来の①「基礎資料研究活動」、②「研究データの保存」、③「研究データの発信」というサイクルで特色あるアジア研究を継承・発展させつつ、2023年3月開催の研究データベース会議の経験を踏まえ、新たに④「研究データの継承」を加え、恒久的な保存体制の構築を目指す（下図）。



①「基礎資料研究活動」では、100年間に渡る東洋文庫の伝統的なアジア研究を継承・発展させるため、13研究班が20の研究テーマ（次頁図）を設定して、蔵書資料の調査に基盤を置いた基礎資料研究に継続的に取り組む。

総合アジア圏域研究班を中心に、従来の紙質分析、歴史地図研究、コルディエ文庫研究、旅行記研究等に加え、2024年度に東洋文庫が100周年を迎えることを機に、東洋文庫アーカイブ（草創期の文書・書簡等）の整理・分析を行い、とくにモリソン文庫の保存管理の現状と課題に焦点をあてて調査を進める。

【研究班と基礎資料研究テーマ】

No.	研究班	基礎資料研究テーマ
1	総合アジア圏域	総合的アジア研究データベースの発展と継承
2	現代中国	現代中国の総合的研究（6）
3	現代イスラーム	現代中東・中央アジアの政治史・社会史とデジタル資料
4	前近代中国	『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討
5		東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究
6		中国社会経済・基層社会用語シソーラス (thesaurus) の構築
7		中国近世の法と社会の構造解明
8	近代中国	20 世紀日本の中国調査研究機関に関する総合的研究
9	東北アジア	近世朝鮮研究資料の基盤的データベース構築
10		清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究
11		清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化
12	日本	岩崎文庫貴重書の書誌的研究（6）
13	中央アジア	中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究
14		中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究
15		日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信
16	チベット	チベット語資料研究データベースとチベット文化の継承
17	インド	インド古代～近世における文書資料の研究
18	東南アジア	近世後期の東南アジアをめぐる旅行記史料の研究
19	西アジア	文書資料のデータベース化にもとづく比較制度研究
20	東アジア資料	東アジアにおける民族芸能資料の研究

②「研究データの保存」では、「基礎資料研究活動」によって新たに生成された研究データを、より汎用性の高い状態で保存・管理するべく、画像共有のための国際規格IIIF (International Image Interoperability Framework)、テキストデータの共有・継承のための国際的なガイドラインTEI (Text Encoding Initiative) の導入を継続する。具体的には、総合アジア圏域研究班の研究データベース共同研究グループが中心となり、N-gramによるテキストマイニングのアジア基礎資料研究への応用（中塚亮奨励研究員）、『水経注図』データベース（2021年度公開）への『水経注疏訳注』索引データの取り込み（前近代中国研究班）、近世朝鮮文献ポータルサイトの構築による日本の近代朝鮮史研究における資料状況の可視化（東北アジア研究班）、蔵書・画像・研究・保存修復記録・展示記録・紙質分析等の各データベースの連携（2021-2023年度の計画を継続）等に取り組む。東洋文庫アーカイブの画像とメタデータを連携させ、「100周年デジタルアーカイブ」として公開する。

③東洋文庫では国際シンポジウム・ワークショップ・講演会の開催、出版物の刊行、東洋文庫リポジトリERNEST (<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>) での電子的公開、研究データベースの公開等の方法で、研究活動の結果得られた専門知識・成果の発信、すなわち「研究データの発信」に努めてきた。このうち国際シンポジウム等の報告内容を論文化して出版し、それをPDF形式にてERNEST上で公開する、という一連の流れが形成されつつある。そこで、これまで以上にその連動性を高め、発信力を強化する。

④2015年度以来、東洋文庫では「総合的アジア研究データベースの構築」をテーマにデジタルデータの国際規格化を導入し、着実に成果を上げてきた。その一方、過去に作成した大量のデジタルデータをいかに継承するかが深刻な問題となっている。そこで「研究データの継承」のサイクルを新たに組み込み、デジタルデータの記録媒体の劣化・故障等に備え、記録媒体の点検・管理・マイグレーション（記録媒体の更新）を計画的に実施し、クラウドサーバも活用して長期保存が可能な体制の構築を目指す。また、2020年度より運用している専用サーバを増強しつつ、寿命による故障に備え、2025年度を目処にサーバの交換を行い、クラウドサーバと相互補完的に運用する。

上記の新たな研究活動のサイクルを稼働させる中で、研究データベースの構築や国際シンポジウムの運営等の機会を通して若手研究者を育成し、日本学術振興会特別研究員PD・奨励研究員・嘱託研究員へとステップアップさせ、科学研究費の獲得等を経て研究機関への就職に繋がるよう支援する。とくに2022年度に創設した榎原研究奨励金や、学術交流協定を結ぶHarvard-Yenching Instituteの各種プログラム等を活用して海外機関での資料調査・学術交流をより一層支援する。

東洋文庫では2024年に創立100周年を迎えるにあたり、2023-2027年度の期間、「100周年記念事業」として、基礎的なインフラ全般の点検・整備・増強等を重点的にを行い、次世代に東洋文庫の諸活動を継承・発展させるための事業を展開している。特定奨励費では「100周年記念事業」と連携・連動しながら、「2024-2026年度の特定奨励費による研究事業の目的」（pp.2-3）に掲げた4つの重点事業、（1）アジア基礎資料研究：研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進、（2）総合的アジア研究データベース：国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築、（3）資料研究成果の発信：国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動、（4）若手研究者の育成：海外機関との学術交流の支援強化、に取り組む。

（1）アジア基礎資料研究：研究環境の多様化への対応と国際共同研究の推進

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎、太田啓子

東洋文庫には290名におよぶ研究員が所属し、東は日本から西は中東までのアジアの全域および北アフリカまでに及ぶ諸地域の歴史・社会・文化を対象として、地域研究の手法を用いて研究に取り組んでいる。研究班・研究グループは地域やテーマに基づいて組織され、アーカイブを含む文献・地図・写真・動画等の諸資料について研究を進めている。

資料のデジタル公開等による図書館の電子化が進む中、資料の現物（書籍・地図・絵画・考古遺物・陶器等）からしか読み取れない情報（紙・墨等の素材や生産された時代・地域等）を分析・研究・蓄積・公開していくことは、アジア・ヨーロッパの様々な時代・地域の資料を所蔵する東洋文庫だからこそ実現可能な研究課題である。

そこで、総合アジア圏域研究では、今期の中心テーマたる「研究データベースの発展と継承：研究データの国際規格化の推進と保存管理の恒久化を目指して」を実行に移すため、新たに設定された4つの重点事業項目に対して、総合アジア圏域研究班が中心となって、すべての研究班・研究グループとの協同のもと、時代縦断的、地域横断的な研究活動を推進する体

制を構築する。これら人文的研究手法に、情報学の専門家によるデジタル技術を組み合わせることで、文理融合型アジア資料学の道を探求しつつ、アジア基礎資料研究と総合的アジア研究データベースの発展と継承に取り組む。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、「総合的アジア研究データベースの発展と継承」をテーマに、下記の研究に取り組んだ。

＜紙質調査＞

紙質データの蓄積を継続しつつ、国内外の研究者との交流を重ねた。古典籍の紙質非破壊調査分析法の技術と正確度を高めるため、国内では東京文化財研究所と国文学研究資料館の保存科学の専門家と共同研究を行った。静岡県工業技術研究所富士工業技術支援センターの繊維長分布測定装置（L&W Fiber Tester Plus）を利用して、ヨーロッパ古典籍の紙の繊維の長さ・幅などの分布を測定し、キーエンス社製デジタルマイクロスコップで取得した非破壊分析の結果と比較し、非破壊分析調査法の検証を行った。

国外では、中国の紙質分析専門家との交流を重ね、非破壊分析法の改善点を議論した。さらに、国際会議への参加を通して、中国大陆、台湾、アメリカの研究者と学術交流し、非破壊調査による書物の物質研究の角度から、学際的人文学研究の将来性と、デジタル化した資料と紙質情報を紐づける総合研究アーカイブを構築することの重要性を改めて認識した。

そのほか、1月26日に防衛大学の学生に東洋文庫の紙質調査研究を紹介した。

＜古地図研究＞

2024年度に100周年事業の一環として修復を行った『坤輿万国全図』の閲覧調査を、7月10日に東洋文庫内外の専門家とともに実施した。12月3～5日に香港中文大学・香港科技大学で開催された The Territorial Management and its Mapping Process in East Asia にて、高橋公明研究員が“Excavating Three Layers Map: Map of Kyushu and Map of Ryukyu Kingdom in the Fifteenth Century”と題する報告を行った（「研究班と基礎資料研究テーマ」のNo.1（p.14参照）。以下「No.*」と記す）。

現代中国研究では、「現代中国の総合的研究（6）」をテーマに、政治・外交、経済、国際関係・文化、資料の4グループが相互に連携しながら研究活動に取り組んだ。政治・外交グループは国際研究・セミナーを活発に行い、日本の研究を世界に広めると同時に、国内外の研究者との交流を推進した。国際関係・文化グループは改革開放初期の貴重な史資料（例：叢書類）の収集に着手し、東洋文庫の新たな方向性を模索しており、同時期の政治思想史・文化史研究の促進のため中央研究院近代史研究所（蘇聖雄氏等）と学術交流を重ね、史料検討会をオンラインで開催した。政治・外交、経済、国際関係・文化3グループ合同で、後期東洋学講座をテーマ「中国というダイナミズム：歴史・外交・経済から迫る」のもと全3回担当し、研究成果の一般への普及に努めた。資料グループは、モリソンコレクション形成の背景にある人的・知的ネットワークや歴史的・文化的事情の解明を目標に、研究活動を実施し、2027年度以降の成果公表について議論した（No.2）。

現代イスラーム研究では、中東・北アフリカおよび中央アジア地域における立憲主義

および立憲体制の資料調査および文献研究をさらに継承・発展させるべく活動を実施した。前年度に引き続き「中東・中央アジア諸国基本法令 日本語データベース」の継続的公開のため、「1979年イラン革命憲法」「1921年トルコ国憲法」「1924年トルコ共和国憲法」「1861年チュニジア憲法」の厳密な翻訳作業を実施し、新たに「1866年エジプト基本法」の翻訳作業を開始した。前期東洋学講座をテーマ「トランプ第2期政権の4年間と中東の政治的変動」のもと全3回担当し、研究成果の一般への普及に努めた(No.3)。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

前近代中国研究班のうち『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討」グループでは、文献史料の精密な理解と新出史料を利用した研究を両軸とした中国古代史研究の深化を目的に、原則月2回オンライン形式(対面も併用)で研究会を開催した。前年度から新たに取り組みを始めた『水経注疏』巻13漯水篇の研究を順調に進めた。また、中国古代地域史研究に資する重要史料の解明に向けての基礎的作業として、オンライン形式で『嶽麓秦簡(肆)』所収の始皇帝時代の律令条文の講読を進めた。また2025年度刊行の論文集『簡牘資料にみる中国古代の国家と社会』のために研究検討会を継続して開催した。国際交流については、研究滞在中の研究者(中国武漢大学、韓国ソウル大学)や留学生の参加を得たほか、国外研究者との連絡を絶やさぬように努めた(No.4)。

「東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、前年度に続き韓国の現地調査を行い、慶尚南道咸安郡・昌寧郡、釜山市における加耶の遺跡を踏査するとともに、国立金海博物館や釜山市立福泉博物館等で加耶の出土遺物の資料調査を行った。これによって朝鮮三国時代加耶の最新資料を入手することができた。また、中国大陆の漢代～魏晋南北朝時代、および朝鮮半島の原因三国～三国時代の発掘調査報告書の収集を継続した(No.5)。

前近代の中国社会は、早期から表層と基層とに二分し、表層であり、識字と官界への入仕とを独占した「士」の階層と、識字に弱く「士」に奉仕する役割を負わせられた「庶」である基層の階層が峻別され、儒経イデオロギーの規範がこれを支え、官僚制が長期に聳立してきた。社会全体は時代の進展とともに、転変と発展をとげ、多極な分化を遂げたが、その変化・発展の実相を全一的、統合的に分析することは、表層の記録が豊かで体系的に伝存するのに比べて、基層の記録が微少で散漫である故に困難であった。全一的な動態を探り、統合的な分析によって研究の新生面を開くためには、表層と基層の社会の接合面、交渉の局面を積極的に究明し推進する必要がある。

「中国社会経済・基層社会用語シソーラス(thesaurus)の構築」グループの活動は、民衆日常の必携知識として生み出され、上下に広く流通した〈日用類書〉に着目し、地方裁判所の運営、地方官の判決内容の実態、商人と算数の必要知識、医療の実態、民間宗教である仏教道教寺院の日常運営の基礎知識等の資料各項を訓読し、語彙に詳注を施す作業を推進して、これまでほぼ空白であった中国旧社会の表層と基層の接合面に

新しい照明を加えようとするものである。

今日、旧中国の伝統文化・経済史・社会史・法制史に関心を持つ研究者・読者は増加しているが、既存の辞書のほとんどは伝統漢学を読解する工具として編纂されており、世相の実態、真相についての知識を求める人々が、随時座右に参照できる用語解、術語解はこれまで存在しなかった。東洋文庫では創設以来、『歴代正史食貨志訳註』と題する事業を継続し、10種の『正史食貨志』本文の訓読と詳しい注釈を蓄積し、『論叢シリーズ』として2009年までに『宋史食貨志訳註』(一)～(六)・索引、計7冊(総頁数3,997頁)を公刊してきた。本研究はこれらの永年の蓄積に基礎を置くものであり、近年、重点的に取り組んできた【基層の社会経済についての用語解の編纂とデータベース化】の作業は、目下、集約の段階を迎えつつある。

そこで、これまで継続してきた明代日用類書『新刻天下四民便覧三台万用正宗』(以下『三台万用正宗』と略す)の訳注作業を一層深めてデータベースとして公開するとともに、その主要部分を改めて見直し、他の日用類書との比較を行って、明代日用類書全体を通観する視点を探る。これは基層社会における「知」のあり方を考える重要な手がかりとなり、中国独特の〈柔らかな〉基層社会を捉えるための基礎となるはずである。

2025年度は、①〈商旅門〉〈音楽門〉〈護幼門〉〈医学門〉〈僧道門〉は、2026年度以降の研究データベース公開に向けて、下記のとおり修正及び準備作業を進めた。2024年度に訳注を完了した『三台万用正宗』巻21〈商旅門〉全体の訳註の訳文の見直し、関連する東北大学狩野文庫蔵『商賈指南』との校合、注釈等の整理を行い、最終原稿の読み直しを重ね、Zoom 読み合わせ会は2025年3月時点で41回に及んだ(担当: 斯波義信・渡辺紘良)。巻9〈音楽門〉の訳註が完了し(担当: 松浦晶子)、巻26〈医学門〉下段は完了した訳註の修正を行い、続いて上段の訳註に入った(担当: 土肥祐子)。巻27〈護幼門〉(小児医療と医薬)は訳註を完了し、上段の訳註に入った(担当: 白山友里恵)。巻39〈僧道門〉は2026年度に訳註を完了する予定である(担当: 石川重雄)。②光緒2年(1876)刊(道光7年(1827)頃刊の重刻本)の釈顯承集・釈儀潤校『参学知津』、及び民国初『武林進香録』・『武林進香須知』の路程書・巡礼書は二分の一の訳註を完了した。今後は月例研究会で報告を行い、新たに入手した『参学知津』の原書画像を含め、データベース公開に向けた準備作業を進めた。③12月23日に渡辺紘良研究員が研究報告「宋代の漕運問題」を行った(No.6)。

「中国近世の法と社会の構造解明」グループでは、史料に基づく実証研究の報告及び討論を行っており、2025年度は5月31日に熊遠報「1903年の賽金花——以虐妓致死案的处理与賽氏自我叙説为中心」、11月22日に伊藤一馬「北宋『边境军事社会』と蕃部」、3月12日に山田賢「丁治棠『晋省記』の世界」を開催した。研究会には日本に滞在中の海外の研究者が討論に参加した(No.7)。

近代中国研究班では、研究テーマ「20世紀日本の中国調査研究機関に関する総合的研究」に関する研究会を2回開催し、「戦中期における漢口日本商工会議所について——『漢口日本商工会議所所報』から見る」、「上海自然科学研究所と『中国文化情報』について」、「満洲における日本酒醸造業調査」などの研究報告と、それをめぐる討論を積み

重ねた。中国社会科学院近代史研究所の張会芳革命史研究室副主任、李在全中華民国史研究室主任等の東洋文庫訪問に対応し、学術交流を深めた。大型コレクションを購入するなど、近現代中国関係書籍の系統的な収集に努めた（No.8）。

東北アジア研究班のうち「清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究」グループでは、満族関係資料の研究の一環として、清朝満洲語文書資料、とくに東洋文庫所蔵「鑲紅旗檔」（鑲紅旗満洲都統衙門檔案）、「鑲白旗檔」（鑲白旗蒙古都統衙門檔案）をはじめとする諸資料に関する基礎的な研究を行った。1980年代以降に班員が実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東をはじめとする調査の画像・映像資料等に対する整理・研究を継続した。海外学術交流については、中国の政治状況がかなりナーバスな環境にあり、現在、中国以外の研究機関との交流について模索している（No.10）。

「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループでは、これまで取り組んできた東洋文庫所蔵の清代文献史料類のうち、漢文以外の言語文字を用いて記載されたものを対象に、デジタル化公開に向けた整理分析作業を進めた。満洲文と漢文が混在する東洋文庫所蔵の清朝『壇廟祭祀節次』全6冊の解読を継続し、第2冊所収「社稷壇（後半）・朝日壇・夕月壇」と第3冊所収「文廟」の出版準備を進めた。また、中国古代から中華民国までに至る「貨幣経済を背景とする商人活動と交通網」の流れについて、「北山富久二郎旧蔵貨幣コレクション」を用いて広くユーラシアの視点から検証する作業を開始した（No.11）。

日本研究班では、2027年度の『岩崎文庫貴重書書誌解題XII』刊行に向け、収録する貴重書の選定を行い、『岩崎文庫和漢書目録』に「浮世草子」として掲載される貴重書144点の内、アイウエオ順にして後半の63点を選び、その書誌解題の執筆作業について打ち合わせた（No.12）。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

中央アジア研究班のうち「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループでは、毎月1回のペースで「突厥碑文研究会：トニユクク碑文研究」を原則オンライン方式で日本、ドイツ、トルコを結びながら開催し、トルファン所蔵のウイグル文字・ブラーフミー文字を中心とする古文献の基礎データ研究の復活を目指し、中国の研究者との連絡再開を試みたが、先方担当者の異動もあり、なお模索中である（No.13）。

「中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究」グループでは、ウズベキスタンおよびトルコの研究者の協力を得て、最新の研究成果と資料の共有を進めた。また、近現代中央ユーラシア定期刊行物の講読研究会を継続し、最新の研究成果を共有しながら研究を推進した（No.14）。

「日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究、国際発信」グループでは、内陸アジア出土古文献研究会の例会を計10回開催し、研究班の内外から報告者を得た。2025年5月より、例会の記録を東洋文庫ホームページの「研究活動一覧」ページにて公開した（<https://toyo-bunko.or.jp/organization/909/>）。研究会では、来日中（8月）なら

びに留学中（6月）の中堅・若手の中国人研究者による報告を実現した。これは今後の国際共同研究推進への布石でもある（No.15）。

チベット研究班では、「チベット語資料研究データベースとチベット文化の継承」をテーマに、チベットの歴史、言語、宗教（仏教・ボン教）、社会に関する一次資料（トゥカン著『一切宗義』、『く阿闍世王経』蔵・漢諸本校訂対照テキスト）、中央アジア出土チベット語文献、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』、パツァプ・ニマタク『根本中論般若釈』の調査研究を行った（No.16）。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

インド研究班では、「インド古代～近世における文書資料の研究」をテーマに、4月12日、2月21日に研究会を開催し、主要論点の1つとして気候変動が歴史に及ぼした影響について議論した（No.17）。

東南アジア研究班では、研究テーマ「近世後期の東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」を推進するため原則月4回の研究会を開催した。前年度に続き、基礎資料研究の重要性を再確認し、また東洋文庫の抱える資料や研究者の利点を活かし、前近代と近現代を包括的に視野に入れることを目指した。2025年度は、引き続き1821-22年にシャムとコーチシナの宮廷を訪問したイギリス人 J. Crawford の旅行記 *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin China* (London, 1828) の第2章・第3章（50-90頁）を輪読し、南シナ海からシャム湾へ入り、チャオプラヤ河口からバンコクに至る記録に着目し、河口からバンコクの王都に向かうため、外来者が王宮関係者といかなる交渉を持ったかを検討した。また近世から近代への移行期を検討するため、J. Th. P. Blumberger, *De nationalistische beweging in Nederlandsch-Indië* (Haarlem, 1931) の”Moehammadyah”、”Ahmadyah”の章を輪読し、20世紀初めのオランダ領東インドにおけるイスラム改革主義運動の動向を考察しつつ、近代移行期の歴史観や社会観の変容について検討した。上記の英語文献とオランダ語文献の講読を隔週ごとに進めた。2020年度購入の集豊（Qiep Hong）文書（全8箱）について、①帳簿（華語）、②請求書、納品書、受領書、送付状（蘭、華、マレー語）、③取引先との書簡（蘭、華、マレー語）、④社会活動関連（主に華語の中華総商会、華語学校、救国基金に関する文書）、⑤その他（写真など）のカテゴリーのうち、すでにデジタル化した文書に基づき、取引先や親族の分析を進めた。また④の学校や社会団体への寄付文書は、1930年代以降の華人社会の状況を検討するための重要な資料であることが明らかとなっており、国内外の研究者との共同研究や現地調査を行う計画を立てた（No.18）。

西アジア研究では、東洋文庫所蔵のヴェラム文書の研究に取り組んでいる。ヴェラム文書とは、皮紙に書かれた文書の総称で、東洋文庫はモロッコで16～19世紀に作成された文書19点を所蔵する。その内容は公証人や裁判官のもとで作成された、不動産の売買・賃貸借・相続などの取引契約にかかわる文書であり、そのうち15点（フェスで作成）について、アラビア語テキストの校訂と解説と研究を、TBRL シリーズで刊行

した（*The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries Part I & Part 2*, 2015, 2018）。ヴェラム文書の校訂・研究は世界で初めてのものであり、広くイスラーム法・イスラーム法廷に関わる研究に寄与するものである。2025年度はその研究データベース公開に注力した（No.19）。

資料研究では、中国、台湾、香港、東南アジア華人社会等に所蔵される文献資料の現地調査による探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を促進する目的のもと、台湾の中央研究院歴史語言研究所との間の資料交換協定（2006年締結）に基づき、同研究所から漢籍電子文献資料庫（1573種約8億7182万字）の提供を受け、東洋文庫からは貴重洋書約10,000コマのデジタルデータを提供し、双方とも大きな研究上の利便を得た。協定は3年更新で、2026年度末に新たな更新時期を迎える（No.20）。

研究会や種々の打ち合わせについては、Zoom ミーティングや Webex ミーティング等を活用した、オンライン形式の研究会や、オンラインと対面を併用した研究会の開催が常態となり、研究会等への参加がむしろコロナ禍以前より容易、活発な状況が続いている。2025年度の研究会の開催回数と人数は、次のとおりである。

年月	総回数	総人数	対面		併用			オンラインのみ	
			回数	人数	回数	人数		回数	人数
						対面	オンライン		
2025年4月	24	181	14	86	5	36	35	5	24
5	17	158	6	41	10	62	50	1	5
6	20	238	7	49	8	81	63	5	45
7	20	206	8	64	9	76	52	3	14
8	9	65	2	11	4	25	14	3	15
9	16	153	6	40	7	55	44	3	14
10	15	135	4	18	8	47	54	3	16
11	17	481	4	29	10	165	275	3	12
12	17	314	8	59	7	111	137	2	7
2026年1月	14	170	5	31	5	49	59	4	31
2月	26	406	9	45	13	131	179	4	51
3月	26	272	14	79	9	72	105	3	16
総計	221	2779	87	552	95	910	1067	39	250

2025年度の国際共同研究の対象機関を研究班別に一覧表化すると、下記のとおり。

研究班	2025年度
総合アジア	ハーバード・エンチン研究所（アメリカ）、オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ東アジア文化研究センター（イギリス）、中央研究院近代史研究所（台湾）、フランス国立極東学院（フランス）
現代中国	中央研究院近代史研究所（台湾）
前近代中国	東亜細亜文化財研究院（韓国）
近代中国	中国社会科学院近代史研究所（中国）
中央アジア	国際テュルク・アカデミー、カザフスタン東洋学研究所（ともにカザフスタン）
チベット	Universiteit Leiden（オランダ）、Universität Wien（オーストリア）
東南アジア	ベトナム社会科学院漢喃研究所（ベトナム）
東アジア資料	中央研究院歴史語言研究所（台湾）

(2) 総合的アジア研究データベース：国際規格化の推進と恒久的な保存体制の構築

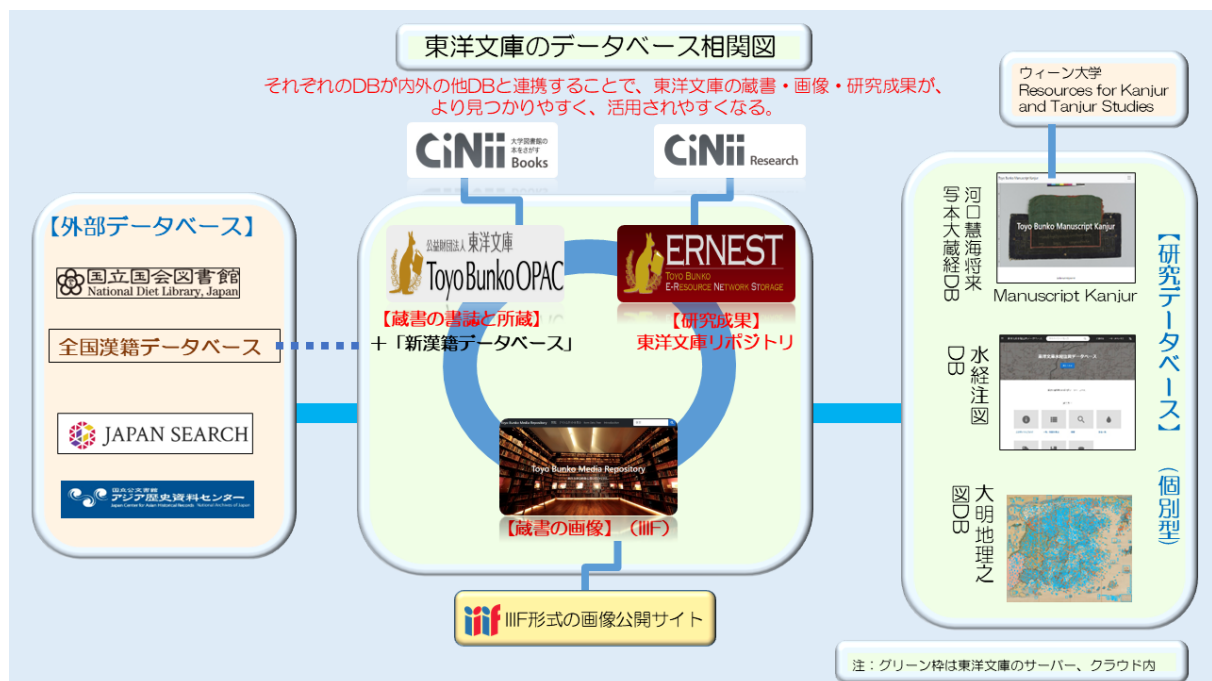
担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎、中村威也

全研究班が参画する総合アジア圏域研究では、研究部執行部の研究データベース共同研究担当者が中心となって、各研究班との協力のもと、アジア基礎資料研究における研究推進サイクル、すなわち「基礎資料研究活動」、「研究データの保存」、「研究データの発信」、「研究データの継承」の各段階において、これまでに構築してきた既存のプラットフォームを活用しつつ、新規の研究データベース構築を行い、また他機関との連携も進める。

「基礎資料研究活動」は100年間にわたる東洋文庫の伝統的なアジア研究を継承・発展させるものである。今期においては、東洋文庫所蔵資料の目録や解題、関連研究論文等、これまで紙媒体で蓄積されてきた過去の研究成果について、著作権等の問題に留意しつつデジタル化して「東洋文庫リポジトリERNEST」に収録することに力点を置く。同時にこれらの研究成果に適切なメタデータを新たに加えて国際規格に合わせて公開することで、ユーザーからのアクセスをより容易なものにする。また、「100周年記念事業」の一環として、研究活動の推進をバックアップしてきた東洋文庫の創立以来の運営管理に関わる重要な文書についても、日本の東洋学の歩みを記録した貴重な資料であるという観点から、「東洋文庫アーカイブ」としてその保管体制を構築し、デジタル化も推進していく。

基礎資料研究活動の成果は、2023年度に初歩的に整備した「蔵書・保存修復記録・展示記録・研究成果の連携データベース」にも収録する。このデータベースにより、NACSIS対応の蔵書目録としてデータ移行が進行中である「Toyo Bunko OPAC」(<https://opac.tbopac.com/>)、およびデータの整備が進みつつある「過去の展示記録」、紙媒体で蓄積されている「資料劣化調査・対策票」の各データと結びつける形で「研究データの保存」をはかると同時に、将来における蔵書の保存修復や展示活動等、蔵書の利活用においても研究データを積極的に役立てていく構想である。さらにすでに導入済みの精密顕微鏡の利用によって得られた蔵書の紙質画像データもこれに組み込み、蔵書の保存・修復に活用することを目指す。

「研究データの発信」面においては、研究班等により蓄積・作成されたデータについて独自の実験性を持ったデータベースを構築すると同時に、画像共有のための国際規格IIIF (International Image Interoperability Framework) やテキストデータの共有・継承のための国際的なガイドラインTEI (Text Encoding Initiative) に基づく形で公開する作業を継続する。また公開データには適切なライセンス付与を行い、ユーザーによる独自の関心に基づくデータ利用や、データを利用した研究の進展を促す。さらに、地理的・時間的なメタデータ付与、絞り込み検索機能の充実、リンクトデータ (Linked Data) 等、データベース間でのデータ共有技術の応用等により、データの発見性を高めることを目指す。上に述べた東洋文庫における「研究データの発信」を図式化すると、次のようになる。



最後に、「研究データの継承」では、デジタルデータの記録媒体の劣化や故障のリスクを最小限にするため、既存のデータも含めた記録媒体の点検・管理、およびクラウドサーバを活用した保管や定期的なマイグレーション(記録媒体の転換)体制を構築する。同時に、複数の場所における保管に向けた計画を進める。また、東洋文庫における研究データサイクルの流れを不断に検証するため、定期的に東洋文庫内外の研究者、とくに文系・理系を問わず若手研究者を集めて「研究データベース会議」を開催する(No.1)。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、研究データベース共同研究グループが中心となり、各研究班と共同のもと、下記の研究活動に取り組んだ。

2022年度に構築した画像公開共有のための国際規格であるIIIF(International Image Interoperability Framework)により画像を公開するためのリポジトリ「Toyo Bunko Media Repository」(以下「TBMR」と略す)への画像追加を継続した。本リポジトリは、今後東洋文庫における画像公開の標準フォーマットとして機能するものであり、書誌データベースであるToyo Bunko OPAC、論文等の研究成果のデータベースである東洋文庫リポジトリERNESTと連携させながら、積極的に活用していく。

2025年度新たに公開した主な資料群は、「西鶴本」(20件102冊、2778画像)、「壇廟祭祀節次」(6冊、299画像)、「中華民国国民政府(汪政權)駐日大使館檔案」(54冊、8871画像)、「拓本資料・大型資料」(193件、474画像)である。

Toyo Bunko Media Repositoryの「拓本資料・大型資料」のコレクション

Toyo Bunko Media Repository アイテム(資料) 閲覧・検索 階層検索 アイテムセット(コレクション) を見る このページについて 検索

拓本資料・大型資料

タイトル	拓本資料・大型資料
内容記述/Description	東洋文庫が所蔵する拓本資料・大型資料です。現在193件公開しています。 拓本資料公開リスト(2026.1.7現在)
資源識別子/Identifier	takuhon
識別子	0010_0002

1-30 of 193 results 1 / 7 登録日 降順 並び替え 詳細検索



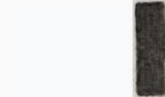
□□姓復捐重建□□題名碑



簡照南碑



上海總商會地址類末記并上海總商會地圖



本会募金団姓名捐數碑



本会募金団経募題名



四明木作従義会捐助存入四明公所碑



四明木商永盛社碑



四明公所販業老長寿会碑誌

また、下記の各データベースと連動させる形で必要な画像を追加した。

西アジア研究班との協力のもと、モロッコのアラビア語契約文書（15点）の基本情報（作成年代、内容（法的行為）、取引者、対象物件など）の一覧データ、写真画像、アラビア語校訂テキスト、英文解題、注釈、参考図表（Chart、系図、署名）を関連づけたデータベースを構築する作業を行い、完成した。

2021年度公開の「水経注図データベース」*について、中国古代地域史グループの研究成果である『水経注疏訳注』のシリーズの索引を元に、訳注内の地名データと『水経注図』上の地名をリンクさせる機能を追加し公開した。さらに、地図表示機能を改善した。

*中国古代地域史研究の基礎資料ともいえる『水経注』の研究にとって極めて有用な『水経注図』（楊守敬・熊會貞撰、光緒31年（1905）宜都楊氏觀海堂刊本朱墨套印、全8冊）のデータベース

100周年事業を機に整理された記録の活用に向けた作業の一環として、蔵書の書誌、ミュージアム開館以前も含めた展示記録、保存修復の記録、関連する研究データが連携した「展示保存修復研究連携データベース」のプロトタイプ版（2023年度構築）につき改良を加えた。また東洋文庫リポジトリにおいても過去の東洋文庫の歩みを記録した資料の公開を進め、「東洋文庫の歴史」のカテゴリーのもとで過去の展示目録等を公開した（https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1701071161522）。

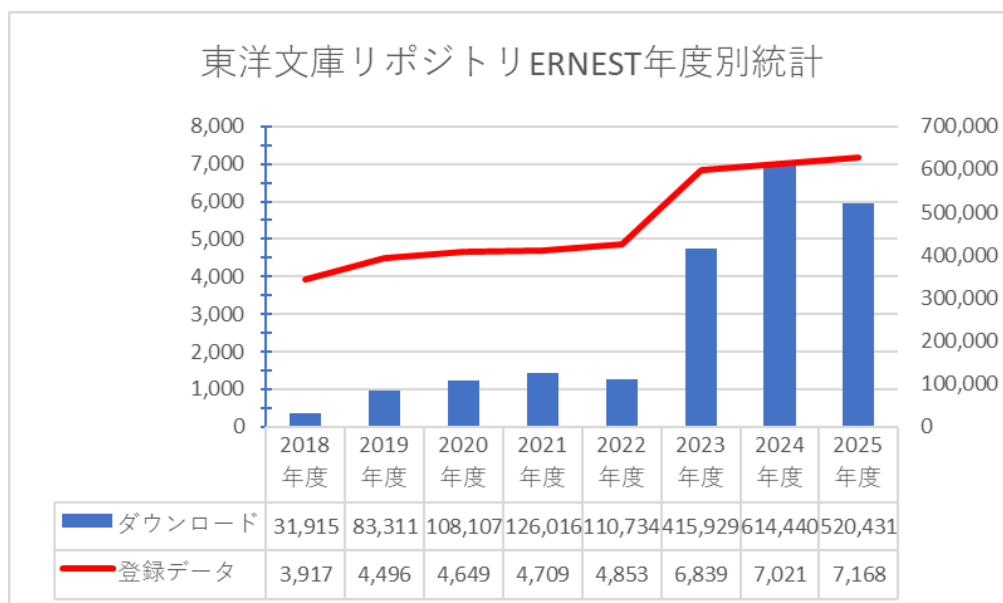
文理融合型アジア資料学の主要課題として、紙質調査研究において、データの蓄積を継続しつつ、国内外の研究者との交流を重ね、静岡県工業技術研究所富士工業技術支援センターの繊維長分布測定装置（L&W Fiber Tester Plus）によって得られたヨー

ロッパ古典籍の製紙材料の繊維幅、長さ、配分等の大量のデータを、キーエンス社製デジタルマイクロスコプで取得した非破壊分析の結果と比較するなど、非破壊分析調査法の検証方法を考究した。

東洋文庫の刊行物のデジタル化公開をより一層推進するため、2018年9月、東洋文庫リポジトリERNESTを新システム「JAIRO Cloud」に移行して以降、データの充実に努めてきた。その結果、登録データ件数は7,168件に達し（2026年3月現在）、2025年4月～2026年3月のダウンロード件数は520,431件を記録した。今後、研究員の研究成果やその副産物を保存管理するための受け皿としても活用していく（<https://toyobunko.repo.nii.ac.jp/>）。

2025 年度東洋文庫リポジトリ「ERNEST」利用統計

年 月	検 索	閲 覧	ダウンロード
2025 年 4 月	9,366	15,556	31,758
5 月	13,438	15,296	32,098
6 月	6,915	5,994	33,256
7 月	8,279	14,997	53,843
8 月	8,518	10,058	37,053
9 月	8,974	10,340	45,243
10 月	9,959	11,471	64,130
11 月	10,338	12,122	31,960
12 月	11,745	15,673	43,697
2025 年 1 月	15,272	14,289	58,962
2 月	11,567	9,214	42,728
3 月	10,477	13,988	45,703
総 計	124,848	148,998	520,431



※2023 年 8 月より新システムによるリポジトリの公開開始。統計方法も変更された。

2026年2月28日に研究データベース会議をオンライン形式で開催した。プログラムは下記のとおりである。

《プログラム》

○開会：趣旨説明

○デジタル人文学セミナー 第1回「デジタル人文学の全体像」

中村 覚（東京大学史料編纂所助教）

○データベース事例報告「ヴェラム文書総合データベース」

三浦徹、佐藤健太郎、原山隆広（東洋文庫西アジア研究班研究員）

当日の質疑応答を受け、中村覚氏が「TEI Tools」を作成し、公開した。本アプリケーションは、WordファイルをドラッグアンドドロップするだけでTEI形式のXMLファイルを生成でき、さらにXMLファイルを「TEI/XMLビューワ」にアップロードすることで、ウェブ上で実際にどのようにTEI形式のファイルが表示されるかを確認できる(<https://toyo-bunko.github.io/tei-tools/>)（No. 1）。

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、東洋文庫ならではのコレクションである「日本人中国旅行記」の補充およびPDF化の作業を継続するとともに、「入江貫一文書」を集中的に整理した。この整理によって、すでに公開済みのリットン調査団のアルバムとともに、満洲国関連の貴重な史料が東洋文庫に集約されたことになり、将来、独自のコレクションとして認知されることが期待される。資料グループでは、オーストラリアのニューサウスウェールズ州立図書館（通称ミッチェル図書館）所蔵のG.Eモリソンの日記に対する、機械学習によるデジタル翻刻の作業を着実に進めた（No. 2）。**唐奨研究費**では、モリソンパンフレットの画像整理とデータベースの構築、改良を実行した。2026年度中に、要旨と画像データを統合し、OCRによる全文検索機能を追加し、国内外の研究者が利用できる「モリソンパンフレットデータベース」を完成する予定である（No.2）。

現代イスラーム研究では、西アジア研究班と共同して、「日本における中東・イスラーム研究文献DB」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、1,300の新文献を「イスラーム地域研究資料室サイト」(<https://search.tbias.jp/>)に掲載し、DB文献総件数は65,800件（2026年3月末時点）となった（Nos. 3・19）。また、現在準備を進めている「中東近代史資料データベース」（仮）の作成について、グループ長会議その他で議論・検討を重ねた。その結果、東洋文庫所蔵ファイク・テュリユン関係文書（トルコ現代史関係）および故上岡弘二教授撮影の写真資料（イランおよびパキスタン関係、段ボール箱30箱程度）についてデータベースの構築が可能かどうか検討を始めた（No. 3）。

東アジア研究のうち前近代中国研究班では、「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討」グループが2021年度に公開した「水経注図データベース」(<https://static.toyobunko-lab.jp/suikeichuzu/>)に、東洋文庫リポジトリで公開中の既刊『水経注疏訳注』の地理関係データを接続させる試みを完成させた。また秦漢律令データベース構築のための基礎的作業を進めた（No. 4）。

東洋文庫水経注図データベース

検索キーワードを入力

検索

[詳細検索](#)
[一覧・地図を見る](#)

ファセット図: 本図

クリア

検索結果: 21,245

本図 (21,245 件)

検索

名前

カテゴリ

記号

雅屯河	地形	河川	
拉發哈達河	地形	河川	
夫兒佳阿河	地形	河川	
勒福成河	地形	河川	
佛思亭山	なし		
角哈河	地形	河川	
代魯力河	地形	河川	
瓜兒茶河	地形	河川	
拉法河	地形	河川	
塞外	なし		

Rows per page:

10

1-10 of 21245

+

-

PDFビューア

言語: 日本語

テーマ: ダークテーマ

ID: S5W2(b)C3-27

用語: 鹿蹄山 (2)

選択中の本

水経注疏訳注. 穀水篇

東洋文庫論叢; 第82

2019.3

書籍一覧 (2冊)

水経注疏訳注. 洛水・伊水篇

2

水経注疏訳注. 穀水篇

8

「水経注疏訳注. 穀水篇」の対象ページ (8ページ)

ページ 122

ページ 555

ページ 556

2

ページ 558

ページ 563

ページ 564

ページ 565

最初

前のページ

ページ 556

移動 / 699

次のページ

最後

縮小

100%

拡大

リセット

PDF

テキスト

鹿蹄山は「(空)」に改めていう「(一)黄水が「甘霖」に作って、(二)「華」に「鹿蹄」というものがある。『元和志』河南府(三)寿安縣に、「もと唐の宜陽縣の地であり(四)北魏は新安縣(五)を分けて甘霖県を置いた(六)とあるのがこれである。
 鹿蹄山は「甘霖」に作るが、誤りである。(七)

(一)現在の甘霖は小作河とも称し、河南省伊川縣樊村郷樊村・任村に源を発し、張村を経て伊川縣店ダムに入る。その後再び宜陽縣の界を越えて河村に入り、尹屯村・牛屯村を経て小作河の東北で洛河に入る。全長約三〇キロメートル、流域面積一四六キロメートル(千年前)四四五。
 (二)「鹿蹄」とは「弘農」のこと。諸の乾隆帝の諱が弘農であることから、「弘」字を避けて、「弘」に改めている。
 (三)宜陽は漢代にも県であったことが確認され、以後各王朝でも県であり続ける。ただし県名は唐に福昌に改められ、金にもとに戻るが、元では宮安、明初に宜陽に戻る。
 (四)鹿蹄山(鹿蹄山)は「明一統志」巻一九河南府に「鹿蹄山在宜陽縣。俗名非山。山上多美玉。下多金。甘水出焉。西北流於洛」とある。現在名は「鹿蹄山」。別名「鹿蹄山」で宜陽縣にあり、海拔八八メートル(宜陽縣志)一六〇。また、名前の由来と思われるものとして「鹿蹄山」巻六に引く「九州島要記」に「弘農県有鹿蹄山。山中石上五里七。
 水経注疏訳注 第十六 甘霖

検索

全文検索 (2)

鹿蹄山

検索

クリア

1ページでヒット (全699ページ中)

ページ 186

1

《水経注図データベース》の地図表示機能と、『訳注』との地名リンク機能

「東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、原三国時代～三国時代遺跡の墳墓データベースのうち、楽浪郡の墳墓データベースの追加作業を継続して行った。とくに近年、朝鮮民主主義人民共和国で調査されている楽浪古墳の調査資料を入手し、データベースに追加し、東洋文庫所蔵の梅原考古資料と調査古墳との対比を行い、データベースの補完作業を行った。現在、データベースの公開および研究成果の公表について検討中である（No. 5）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、現行の「中国経済史用語DB」に『中国社会経済法制史用語解』の〈法制篇〉約12,000語を追加する作業を継続した。すでに用語解説データのエクセル入力、及び第一レイヤ～第三レイヤの項目分類は完了し、現在は研究データベース公開に向けての分類、解説文の補訂等の追加作業を継続している。さらに班員と研究協力者が中心となり毎週定期的にZoom作業を継続し、『中国社会経済法制史用語解』出版（東方書店刊、**唐奨研究費**）に向けて約4500項目の法制用語を抽出し終えた。『三台万用正宗』巻21〈商旅門〉及び東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』の語釈1,219項目を整理し、研究データベース公開に向けての補訂作業を継続中である（No. 6）。

近代中国研究班では、近代中国関係日本語文献目録のデジタル化と公開を継続するとともに、出版済みの分類目録のデジタル化公開を進めた（No. 8）。

東北アジア研究班のうち「清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究」グループでは、1980年代以降に班員が実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東をはじめとする調査の画像・映像資料等に対する整理・研究を実施し、データベース化の方法について検討した（No. 10）。「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループでは、クリスチャン・ダニエルズ研究員収集の「雲南石碑拓本」の整理作業とデータベース化に取り組んだ（No. 11）。

日本研究班では、「浮世草子」の貴重書の東洋文庫メディアリポジトリへの画像公開を進めた（No. 12）。

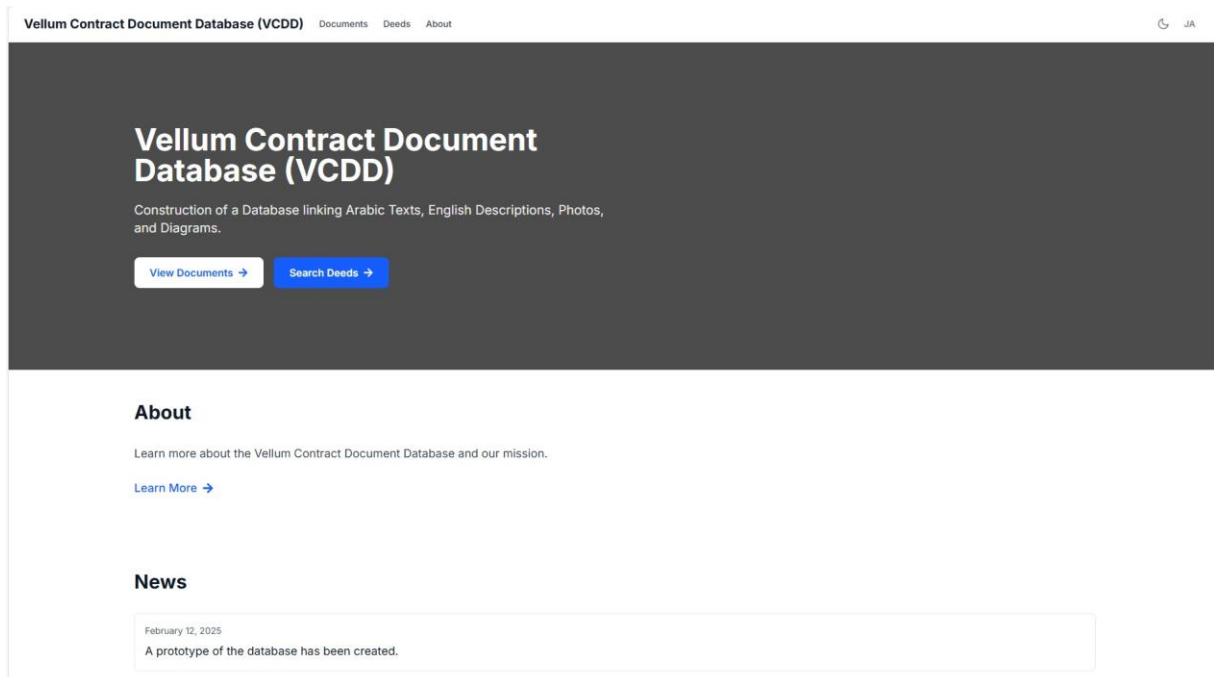
内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループがロシア科学アカデミー 東洋写本研究所（IOM）所蔵のウイグル文字を中心とするテュルク語古文献のマイクロフィルム（東洋文庫所蔵）について、原典の書誌データの統合を継続した。図書部との連携のもと現代ウイグル語出版物の整理・カタログ化、データベース化を進行した。目まぐるしく変化する中央アジア（旧ソ連5か国＋中国新疆ウイグル自治区）における歴史・文化・社会記録を集積するため、1980年代を中心に行われた現地調査の映像を収集・保存する事業の立案を始めた（No. 13）。「日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信」グループでは、日本所在の敦煌・吐魯番文献の具体的な状況を探査しつつ、データベース化の前提となる録文作成作業を試行した（No. 15）。**土肥研究費**による活動として、2024年度に入力作業を完了した「土肥義和氏手写敦煌吐魯番文書ノート」（「土肥ノート」）の点検作業を終え、データベース公開を待つのみとなった（No. 15）。

チベット研究班では、河口慧海請来写本大蔵經の般若部より二万五千頌般若經典4巻

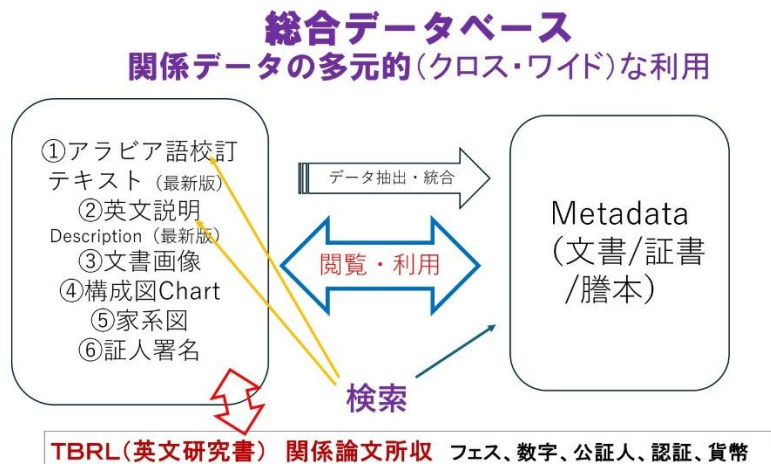
(35～38巻)、十万頌般若經典3巻(17～19巻)、一万八千頌・一万頌等般若經5巻(41巻～43ab、44巻)の画像に基づく研究データベースの作成を継続した。河口慧海 請来チベット語蔵外文献写本を解読し、チベット語活字体テキストとして入力し、電子テキストとして研究データベースの作成を継続し、2025年度は蔵外371A『道次第相承伝』、蔵外42ロォケンチェン著『釈迦のご意図を明らかにする典籍の解説宝蔵』の入力を実施した(No. 16)。**100周年事業**では、十万頌般若經典3巻(20～22巻)、諸経部3巻(72、75、105巻)の撮影を行った(No. 16)。

インド・東南アジア研究のうち**インド研究班**では、小茄子川歩氏(京都大学)に協力を仰ぎ、インダス文明研究資料のデータベース化に着手した(No. 17)。**東南アジア研究班**では、J. Crawford, *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin China*, (London, 1828)の第2・3章のpp.50-90の概要と、*De nationalistische beweging in Nederlandsch-Indië*, (Haarlem, 1931)の”Moehammadyah” pp. 90-101と”Ahmadyah” pp. 102-105の概要を、ページ、トピック、概要、関連情報の諸点から、データベース作成のための基礎データを整理した(件数は、前者68件、後者74件)(No. 18)。

西アジア研究では、TBRLで刊行した計15文書(計149証書、要約を含め計290証書)の基本情報(作成年代、内容(法的行為)、取引者、対象物件、裁判官、公証人)の一覧データをもとに、ここから、文書の画像、アラビア語校訂テキスト、英文解題、参考図表(図解、系図、署名)に関連づけた、多元的重層的な総合データベースを構築した(Vellum Contract Document Database/VCDD)。これによって、基本情報Metadataから、文字・画像等のデータを検索・閲覧できる。試作版を試験公開のうえ、部分的な改修を行い、2026年1月に、東洋文庫ウェブサイトで公開した(<https://toyobunko-lab.jp/app/vellum/en/>)。



データベースの説明や基本事項は、英文によって表示した。この総合データベースの公開によって、モロッコはもとより、より広くチュニジアやエジプトやシリア、オスマン帝国、イランや中央アジアの法廷文書の研究者が、当該資料のデータを検索・閲覧等の利用ができるようになり、国内外でのイスラーム法廷文書の研究に寄与することが期待できる。



以上の概要について、2025年度東洋文庫データベース会議（2026年2月28日）において、三浦徹、佐藤健太郎、原山隆広の3名が報告・質疑を行った（No. 19）。

資料研究では、現地調査によって得られた写真・録画・文献資料の電子データ化、およびデータベース化とその公開に向けた作業を実施した（No. 20）。

（3）資料研究成果の発信：国際シンポジウム、研究出版、リポジトリ公開の連動

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎、太田啓子、中村威也、本間美紀、大橋利光
上記（1）（2）の諸活動の結果得られた専門知識・最新の研究成果について、国際シンポジウム・ワークショップ・講演会の開催、出版物の刊行、東洋文庫リポジトリ ERNEST (<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>) での電子的公開、研究データベースの公開等の方法によって、研究データを国際的に発信し、世界のアジア研究の進展に大きく貢献してきた。このうち国際シンポジウム等の報告内容を論文化して出版し、それをPDF形式にてERNEST上で公開する、という一連の流れが形成されつつある。そこで、これまで以上にその連動性を高め、発信力を強化する。

具体的には、国際シンポジウム・ワークショップの開催を通して、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進し、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実を目指す。国際シンポジウムの運営全般、および総合アジア圏域研究班の諸活動に携わって研究活動を補助する人材、および欧文による成果発信を強化するための人材を確保・育成する。

出版物の刊行では、国内外の大学図書館等にこれを寄贈することで、学生をはじめ若手研究者の参照・利用に供するとともに、アジア諸国との資料交換・学術交流に活用

する。紙媒体での刊行にはこのような教育上の意義や国際交流上の意義があり、当面の間、継続していくが、同時に、東洋文庫リポジトリERNESTを活用して、電子媒体による研究成果の発信をより強化する。なかでも、東洋文庫の諸活動に関する年次報告書『東洋文庫年報』については、速報性が求められる性格の資料であるため、2022年度に電子媒体での発信に完全移行した（https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1078）。2024-2026年度はリポジトリとデータベースを連携させた形式での情報発信への移行を進める。なお、刊行物の詳細は、「Ⅲ 資料研究成果発信」（p.43を参照）で述べる。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、7月13日に徐小潔研究員を発起人として、国際ワークショップ「ポストデジタルデータ化の東アジア文献研究－超域と越境の展望」を開催し、国内外より8名の報告者を迎え、活発な議論を行い、その英文要旨を *Modern Asian Studies Review*, Vol.17に掲載した（No. 1）。11月29・30日、チベット研究班のコーディネートにより、河口慧海請来写本大蔵経のデータベース化プロジェクトを記念する国際シンポジウムRediscovering the Buddhist Canon from Multiple Perspectivesを、同プロジェクトの協力機関であるライデン大学、ウィーン大学の研究者ら国内外の専門家を招聘し、東洋文庫において開催した。その成果出版となる英文論集がTBRLの1冊として2027年度に刊行予定である。さらに、同シンポジウムに先立ち、11月24日に国際ワークショップBuddhist Art and Cultural Heritage in Nepal and the Tarim Basinを東洋文庫において開催した（シルクロード仏教文化研究会と共催）（Nos. 1, 16）。2026年度に現代イスラーム研究班、西アジア研究班、中央アジア研究班のコーディネートにより開催予定の総合アジア圏域研究国際シンポジウム“Middle East and Central Asia’s Relations with Russia: Threat, Alliance, Co-Existence”の準備を進めた（Nos. 1, 3, 14, 19）。

現代中国研究のうち政治・外交グループでは、2025年6月に、Indo-Pacific Observer Research Foundation, Kolkata の Associate Fellow の Pratinashree Basu 氏が「Maritime Geopolitics in the Indo-Pacific」と題する講演を、11月にオーストラリア Griffith University の Kai He 教授が「The Upside of US-Chinese Strategic Competition」と題する講演を行い、活発な議論を交わした。国際関係・文化グループでは、東洋文庫ならではのコレクション「日本人中国旅行記」を活用した日中関係史に関する研究成果を2026年3月のAASバンクーバー大会で欧米圏の研究者に紹介した。改革開放史研究に関する英語特集を *Modern Asian Studies Review*, Vol.17に寄稿し、リポジトリ公開した。また、東洋文庫ホームページ内に研究活動の紹介ページを新たに立ち上げた（https://toyo-bunko.or.jp/research/contemporary_chinese/）（No. 2）。

現代イスラーム研究では、TBRLの1冊として2026年度刊行予定の英文論集（仮題 *Law and Legal Institutions in the Middle East and Central Asia*）について、代表編者の粕谷元研究員を中心に執筆者への依頼を行い、年度末までに一部の原稿が提出された（No. 3）。

東アジア研究のうち前近代中国研究班では、「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時

代の簡牘検討」グループの研究成果として、論文集『簡牘資料にみる中国古代の国家と社会』を刊行し、東洋文庫リポジトリで公開した（No. 4）。「東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、これまで共同研究を行ってきた韓国の東亜細亜文化財研究院と合同で11月1日に国際シンポジウムを開催した。「加耶の港市と日本列島」をメインテーマとして、日韓両国の研究者5人が韓国慶尚南道昌原市石洞遺跡をめぐる最新の調査・研究成果を報告するとともに、予稿集『加耶の港市と日本列島—昌原石洞遺跡を中心に—』を刊行した。東亜細亜文化財研究院とは今後も共同研究を継続し、再び合同シンポジウムを開催することで合意している（No. 5）。「中国社会経済・基層社会用語シソーラス (thesaurus)の構築」グループでは、2026年8月の『中国社会経済法制史用語解』の出版に向けて「公文書」篇の補筆修正を行い、重要語181項目解説部分の参考文献を補った。2025年度末には「財政」「経済」「社会」「公文書」の初稿が出来し、これに「法制」「索引」が加わると、全体で約1300～1400頁となる（No. 6、唐奨研究費）。「中国近世の法と社会の構造解明」グループは、2027年度に『講義 中国近世の法と社会』と題し、広範な読者向けに、研究史と国内外の学界動向を踏まえた広い視野と専門的史料研究とを兼ね備え、史料に基づく最新の内容を分かりやすく論ずる書物を出版する計画を進めており、研究会において執筆予定の内容の報告と討論を行った（No. 7）。近代中国研究班では、12月7日にシンポジウム「20世紀日本の中国調査」を開催し、班員のほぼ全員が研究報告を行うとともに、オンラインを含めて内外より126人の参加を得て充実した討論の場を持つことができた（No. 8）。

東北アジア研究班では、「清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究」グループの成果として『清朝の史跡をめぐってIV 中国東北篇2』を出版し、東洋文庫リポジトリで公開した（No. 10）。「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループは『清朝『壇廟祭祀節次』訳注（三）—太廟・奉先殿・社稷壇（前半）—』を刊行し、東洋文庫リポジトリで公開した。また、東方学会「第69回国際東方学会会議」（5月17日）の国際シンポジウム「中国祭天儀礼の歴史的文脈」、東洋大学「白山史学会」（6月28日）にて研究成果の一部を報告し、後者は『白山史学』第62号（2026年3月）所収の講演録として刊行・発信した（No. 11）。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループは、月1回のペースで「突厥碑文研究会：トニユクク碑文研究」を原則オンライン方式で、日本、ドイツ、トルコを結びながら開催し、成果の公刊に向けた編集作業を進めた（No. 13）。「中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究」グループは、4月16-19日にウズベキスタン（2名）とトルコ（3名）から研究者を招聘して、ジャディード運動（近代中央アジアにおける改革運動）に関する国際ワークショップを開催し、これからの研究課題について幅広い議論を行った（三菱財団研究助成）。本事業については、ウズベキスタンにおいて新聞報道がなされたほか、『日本中央アジア学会報』第21号でも研究動向として報告された。グループの研究成果として3月末に英文論文集 *Tatar Diaspora in Modern Eurasia: Connection, Transformation, Revolution* (TBRL26) を刊行したが、現下の政治情勢に鑑みて、リポジトリ公開のタイミングは慎重に検討する（No. 14）。「日本所在敦煌・吐魯番文書データベース

構築と国際発信」グループでは、2023 年度に東洋文庫にて開催した国際シンポジウムの成果を基礎とする論文集『敦煌・吐魯番研究の最前線』の刊行（2026 年度予定）に向けて編集作業を進めた。研究成果の国際発信の一環として、班員が「数字蔵経洞発布暨絲綢之路大都会：敦煌及絲路沿線の芸術・文献与文化国際学術会議」（6 月、於敦煌市）や「吐魯番学研究院成立二十周年暨第七届吐魯番学国際学術研討会」（10 月、於吐魯番市）など、中国で開催された敦煌・吐魯番学の国際学会にて、研究報告およびペーパーの提出を行った（No. 15）。

チベット研究班では、基礎資料研究の成果として、トウカン著『一切宗義』中国の章（担当：吉水千鶴子、池尻陽子）、『〈阿闍世王経〉蔵・漢諸本校訂対照テキスト』（担当：宮崎展昌）の刊行準備を進めた（No. 16）。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、研究会で議論した気候変動が歴史に及ぼした影響について、その成果の一端を公開すべく、東洋文庫欧文紀要（*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*）の小特集＜気候変動と歴史＞の執筆候補者として、三田昌彦研究員と小茄子川歩氏に寄稿を依頼した（No. 17）。東南アジア研究班では、班の基礎資料研究の成果として、弘末雅士研究員および牧野元紀研究員が、2025 年度刊行の東洋文庫欧文紀要の小特集「近世における東アジアと東南アジアにおけるキリスト教の展開」において企画・寄稿を行った。関連して、弘末研究員は東方学会秋季学術大会のシンポジウム「海域アジアにおける外交と通譯」を組織し、班研究会参加者を中心に報告・討論を行った。その要旨が『東方学』第151号（2026 年1月刊）に掲載された（No. 18）。

西アジア研究では、2023 年度開催の国際シンポジウムに基づく英文論集 *Contracts, Litigation and Their Norms Compared: Asian and Islamic Regions* (TBRL 27) を編集・刊行し、契約と訴訟のシステムとその特徴を論じる、総論、中国4、日本1、アラブ1、トルコ（オスマン帝国）2、イラン2、中央アジア1の12本の論考を収録した。また、2022年にボン大学従属異存関係研究センターおよび東京大学史料編纂所と共催した国際シンポジウム「Strong Asymmetries in Social Relations Compared: The Mamluk Sultanate, Medieval Japan and Beyond（マムルークと武士の比較研究）」に基づく英文論集への寄稿・編集を進めた（2026年度、ドイツ De Gruyter 社より刊行予定）（No. 19）。

研究部は、20年にわたり発行してきた英文誌 *Asian Research Trends*, New series (NART) を2025年度刊行のNo. 20をもって終刊とし、2026年度に年2回刊の電子ジャーナルとして同Third series (ARTT) を創刊する。ARTTの公開には新たに科学技術振興機構提供のプラットフォームJ-STAGEを利用することとし、HTML形式とPDF形式を併用する（PDF版はNARTと同様、東洋文庫の機関リポジトリERNESTにも掲載予定）。

上記の改編と同時に、英文を主とする研究部発行のオンラインジャーナル *Modern Asian Studies Review*／新たなアジア研究に向けて (MASR) も、2026年3月刊行のVol. 17で終刊する。これまでMASRに掲載してきたシンポジウム・ワークショップ等の要旨、研究部・図書部の活動報告、東洋文庫所蔵資料の解題等は、掲載誌をARTTに改めて発表を継続する。

(4) 若手研究者の育成：海外機関との学術交流の支援強化

担当：會谷佳光、相原佳之、片倉鎮郎

東洋文庫では、若手研究者の育成を通して、100年間にわたって積み重ねてきた東洋学の伝統を継承・発展させていくことで、将来にわたって世界の研究者を裨益し、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く市民に還元することを目指している。そこで、下記の取り組みによって、若手研究者が自発的な研究活動を行えるよう支援する。

1. 日本学術振興会特別研究員 PD の受入

日本学術振興会が募集する特別研究員 PD は、博士の学位取得後5年未満の若手研究者が、出身大学とは異なる、新たな環境に身を置いて、自由な発想のもと、主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保を図る制度である。東洋文庫では、特別研究員 PD を積極的に受け入れ、経験豊富な専任の研究員の指導のもと研究活動に取り組めるよう支援する。

2. 東洋文庫奨励研究員の任用

日本学術振興会特別研究員 PD が博士の学位取得後5年未満の若手研究者を対象とするのに対し、東洋文庫の研究活動に参画している若手研究者の中から、博士の学位取得後10年未満の者を選抜して東洋文庫奨励研究員に任用している。奨励研究員には科学研究費や斯波研究奨励金・榎原研究奨励金（ともに年額50万円）への応募資格を与え、東洋文庫の書庫・研究室の自由な利用を認めている。東洋文庫研究班の研究活動への参加を通して実践的な研究指導を受けることで、研究者としての早期の自立を促すなど、若手研究者の育成・雇用促進に取り組む。

従来の「奨励研究員制度」では、日本学術振興会特別研究員 PD として、東洋文庫で受け入れた若手研究者が、最終年度に科学研究費を申請して採択された場合に、奨励研究員に移行することになっていた。しかしながら、不採択となった場合は PD の任期終了とともに東洋文庫との繋がりが途切れることになり、次のキャリアが見つからない場合も少なくない。そこで、2024年9月に「奨励研究員制度」を改定し、PD の任期終了後、1年間の限定で奨励研究員として受け入れることとした。翌年度に科学研究費が採択されれば、科学研究費の採択期間中、奨励研究員の任期を延長する。

3. 東洋文庫嘱託研究員の雇用

日本学術振興会特別研究員 PD、東洋文庫奨励研究員をはじめ若手研究者のポストとして東洋文庫嘱託研究員の雇用を行っている。嘱託研究員は、その専門性を生かして東洋文庫の諸事業に参画しつつ、科学研究費の応募資格を与え、東洋文庫の書庫・研究室の自由な利用を認めている。また、東洋文庫研究班の研究活動への参加をはじめ、研究者としてのキャリアアップに必要な諸活動を行うことができる。任期満了後は、専任の研究員として東洋文庫を拠点に研究活動を行うことができる環境を提供している。

4. 東洋文庫の諸事業への参画を通じた実務経験の蓄積

東洋文庫研究班が取り組む国際共同研究や国際シンポジウム等の運営、『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』等の学術誌の編集、資料の収集・整理、および研究データベース

の構築など様々な場面において、若手研究者を研究支援者として雇用することで、研究者としての実務経験を積む機会を提供する。これらの経験は、自身の研究活動の幅を広げるだけでなく、国内外の研究者との人脈形成に役立ち、研究者としてのステップアップにつながる。

5. 研究発表を行う機会の提供

日本学術振興会特別研究員 PD、東洋文庫奨励研究員、嘱託研究員をはじめとする若手研究者が、研究成果を発表する機会として、「東洋文庫談話会」を開催する。東洋文庫内外の研究者との質疑応答を通して、研究者として成長する場とする。

6. アジア研究入門講座の創設

東洋文庫に在籍する名誉教授クラスのベテラン研究者や、現役の教授クラスの中堅研究者を講師に迎え、若手研究者向けの「アジア研究入門公開講座」を新たに開催し、若手研究者の実力養成に取り組む。

7. 国際的な研究活動に対する支援

外国人講師を招いて若手研究者を対象に英語論文の作成指導を行い、研究成果の国際発信を支援する。

学術交流協定を結ぶハーバード・エンチン研究所の各種研修プログラムを活用して、若手研究者による国際的な研究活動を支援する。

2022年度に第12代理事長榎原稔氏（1930-2020）のご遺族からの寄付金を原資に榎原研究奨励金を設立し、ハーバード・エンチン研究所など学術交流協定を締結する海外研究機関において、調査・研究・学術交流等の目的で海外渡航を希望する若手研究者に対して支援を行う。

〔研究実施概要〕

若手研究者の育成と雇用支援を、研究データベースの構築と並ぶ最重要課題に位置づけ、以下の計画を重点的に展開した。

6月12日に、若手研究者育成事業オンライン説明会を開催し、若手研究者を対象としたハーバード・エンチン研究所（HYI）の Visiting Scholars Program 応募の説明のほか、研究班活動の紹介（2グループ）、東洋文庫の研究資源等の解説（科研費応募、データベース、蔵書・閲覧室の利用について）を行った。2026年度以降の高校生向け「アジア研究入門公開講座」定期開催に向け、12月17日に広尾学園小石川高校の生徒（2年生16名）を対象に試行版講座を開催した。若手研究者2名を AAS2026 Vancouver に派遣し、それぞれ日本人の中国旅行記プロジェクトの成果を報告した。

現代中国研究のうち政治・外交グループは国際研究を活発に行い、またセミナーには多くの博士課程の学生が参加し、若手研究者の育成にも繋げた。国際関係・文化グループは改革開放初期の政治思想史・文化史研究を促進するにあたって、中央研究院近代史研究所（蘇聖雄氏等）と学術交流を重ねるとともに、大学院生とともに史料検討会をオンライン開催した。そのメンバーのうち同グループの活動を裏方として支え、2023年度にグループの活動の一環としてケンブリッジ大学で研究報告した若手研究

者である横山雄大氏が、2025年4月に同志社大学助教として採用された（No. 2）。

現代イスラーム研究では、米国テキサス大学で研究活動を行っていた研究協力者の徳永佳晃氏が帰国し、2026年4月から広島大学に助教として着任した。同氏は班が取り組むイラン憲法の翻訳作業に継続的に携わってきた若手の研究者である。またチュニジア憲法の翻訳作業でも複数の若手研究者（関佳奈子氏、渡邊文佳氏）が現在も積極的に関わっている。なおイラングループでは2月23日に研究会を Zoom で開催し、若手研究者の研究事業への参加を促した（No. 3）。

東アジア研究のうち前近代中国研究班「『水経注』諸注疏の再検討および秦漢時代の簡牘検討」グループでは研究会に多数の若手研究者が参加した。彼らの協力が定期的な研究会の開催や研究成果刊行への原動力となっており、2026年度刊行した『簡牘資料にみる中国古代の国家と社会』には若手研究者の論考5本を収めた（No. 4）。「東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、韓国での現地調査、データベースの作成作業を、大学院生とともに行った。また、国際シンポジウムにおいても大学院生を発表者や討論者として起用し、研究促進に寄与した（No. 5）。

「中国社会経済・基層社会用語シソーラス(thesaurus)の構築」グループでは正確な和文への翻訳及び詳しい註釈を語彙、術語に施す「訳注」作業が活動の中心となっている。永年培ってきた実績、経験、なかでも訳注のスキルは、扱う時代、主題は異なっても、若手研究者にとって、資料の操作、読解の力量を増進するために有益である。月例研究会の参加者は老練な専門研究者が半数を占め、残り半数を占める修士課程・博士課程の大学院生、または PD ないし現役の大学教員にとって、一種の〈上級セミナー〉の役割を果たしている。

研究会に参加する若手研究者のうち、白山友里恵（上智大学大学院修士課程修了）は、中国・日本の医学書読解のスキルを有することから、中国前近代の小児医療・医薬を内容とする『三台万用正宗』巻27「護幼門」下層の訳注を担当し、第93回研究会（2021年7月）から第137回研究会（2025年7月）までに計23回報告を行い、訳注を完了した。明代の〈日用類書〉は非常に難解な資料であるが、老練な専門研究者の指摘を受け議論し、大学院博士課程レベルの力量を身につけた。今後は本訳注の研究データベース公開とともに、査読誌への論文投稿が期待される。松浦晶子（科学技術振興機構専門員）は自身の研究テーマである中国前近代音楽史の知見を活かして『三台万用正宗』巻9「音楽門」の訳注を完了し、第140回研究会（2025年11月）の研究報告「日用類書の音楽についての試論」において、日用類書にみえる音楽の内容を整理し、一般社会における音楽の常識や時代的な変化について検討し、『三台万用正宗』の音楽門の内容を整理した。さらに班員等との質疑応答を受け、研究報告をまとめ直し査読誌への投稿を促した。今泉牧子（東京都市大学塩尻高等学校非常勤講師）は2024年2月に行った第132回研究会をもとに、『上智史学』70号（2025年）に『夷堅志』に見える宋代県令のストレス—地方官の日常業務と心性—を発表した。竹内洋介（東洋大学非常勤講師等）は数回研究報告を行い、「墓誌」研究・唐代史研究を進めるとともに、審査雑誌への投稿、博士論文に取り組んだ（No. 6）。

「中国近世の法と社会の構造解明」グループでは、現在進行中の出版計画に複数の若手

研究者が参加予定であるほか、研究会に随時、若手研究者の参加を呼び掛けた(No. 7)。

近代中国研究班では、東洋文庫奨励研究員が研究会に参加した(No. 8)。

東北アジア研究班のうち「清代満洲語文書及び収集資料のデータベース化の研究」グループでは、満洲語文献講読会の再開を協議し、近く実施に向けて動き出すことになった(No. 10)。「清代中国諸領域の構造分析:政治経済・祭祀儀礼・文化」グループは、学習院大学東洋文化研究所客員研究員の莊卓燐氏が班員に加わり、「北山富久二郎旧蔵貨幣コレクション」をめぐる研究活動に参加・協力することになった(No. 11)。

日本研究班では、『岩崎文庫貴重書書誌解題』XII の執筆にあたり、日本古典文学を専攻する大学院生や若手研究者を書誌調査者として育成することを目的に、基本的な書誌事項の原稿化のためのアルバイトとして雇用するという計画を立てた(No. 12)。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、「中央ユーラシアにおける非漢字諸語文献の研究」グループの突厥碑文研究会において、研究教育職に就いたばかりの若手参加者が活躍した(No. 13)。「中央ユーラシア近現代史資料の収集と研究」グループは近現代中央ユーラシア定期刊行物の講読研究会を継続し、大学院生を含む若手研究者とともに、最新の研究成果を共有しながら研究を推進した(No. 14)。「日本所在敦煌・吐魯番文書データベース構築と国際発信」グループは内陸アジア出土古文献研究会において中堅・若手の中国人研究者が報告を行った(No. 15)。チベット研究班では、資料研究に若手研究者を参加させ、共同研究を行った。2025 年度は JSPS 外国人特別研究員(東洋文庫受入)の Dörte Kamarid 博士を中心に、2 月にチベット仏教研究会を東洋文庫において開催し、若手研究者が研究発表と、パツァプ・ニマタク著『根本中論般若釈』のテキスト講読を行った。また、研究データベースの作成において、画像データの調査に若手研究者の協力を得た(No. 16)。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、韓国出身の申才恩氏が新たに班員に加わったほか、インダス文明研究資料のデータベース化にあたっては小茄子川歩氏(京都大学)に研究協力を仰いだ。両氏には若手研究者として班の研究活動への積極的な貢献が期待される(No. 17)。東南アジア研究班では、班員以外の若手研究者も研究会に参加できる態勢のもと、若手東南アジア史研究者の手になる出版物を積極的に取り上げ、出席者の関心の喚起に努めた(No. 18)。

西アジア研究では、11月29日に「イスラーム地域研究・若手研究者の会」創立50周年記念シンポジウム「イスラーム国家論・イスラーム地域研究の現在地」(共催:東京大学中東地域研究センター)を開催した。「イスラーム国家論」研究会は、東洋文庫(中央アジア・イスラーム研究委員会)に集う若手研究者の発起によって、1975年9月に開始され、1993年には第2世代によって新生・再出発し、2010年度にNIHUプログラム「イスラーム地域研究」との連携に伴い、「イスラーム地域研究・若手研究者の会」に改称した。創立50周年記念シンポジウムでは、創設時のメンバーである小松久男(東洋文庫研究員)の基調講演「イスラーム国家論研究会:草創期を振り返って」とともに、若手研究者の5本の報告と総評(清水和裕・九州大学教授)が行われた。また、東洋文庫が主管した1975~97年の計144回の研究会の概略を編集した略史を編集し、配付した(参考 <http://tbias.jp/reports/20251129>) (No. 19)。

2025年度は、若手研究者育成の一環として下記の者を採用した。

〈嘱託研究員〉

・太田 啓子

研究課題「アラビア半島・紅海文化圏の歴史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため国際シンポジウム等を通じた国際交流事業に従事した。

・中村 威也

研究課題「中国古代地域社会／非漢族研究、中国史料学、コディコロジー」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事するとともに、東北アジア研究班「清代中国諸領域の構造分析：政治経済・祭祀儀礼・文化」グループの研究活動に参画した。

・本間 美紀

研究課題「ペルシア絵画史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

・大橋 利光

研究課題「朝鮮近代史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため『東洋学報』の編集・校閲に従事した。

〈奨励研究員〉

・中塚 亮

研究課題「中国古典長編小説、古典演劇」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業、および研究データベース共同研究に参画した。

・多々良圭介

研究課題「18世紀清代中国における名医の社会的条件—藤井文庫を中心に」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。

・魏 郁欣

研究課題「明清時代における風水師とその活動についての社会史的研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに前近代中国研究班の研究活動に参画した。

・速水 大

研究課題「『敦煌氏族人名集成』の補完」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに中央アジア研究班の研究活動に参画した。

・河野 敦史

研究課題「現代ウイグル語訳『ターリーヒ・ハミーディー』の「序章」に見られる歴史叙述に関する検討—現代ウイグル語資料の活用促進に向けて—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代ウイグル語図書資料の整理とデータベース化作業に参画した。

・島田 大輔

研究課題「天津租界の日本語雑誌『日華公論』に関する基礎的研究—「日華文化提携」の実相—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代

中国研究班の研究活動に参画した。

・鈴木 航

研究課題「国民政府期中国におけるメディア空間の拡大」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに近代中国研究班の研究活動に参画した。

なお、これまでの若手研究者育成の実績として、大学等研究機関の研究職に採用された方について挙げておく。

・太田 啓子

2012年度より嘱託研究員（2015年3月までは「若手研究員」と呼称）として自身の研究課題に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため国際シンポジウム等を通じた国際交流事業に従事してきた。2026年4月に駒沢女子大学観光学部准教授に就任。

・魏 郁欣

2021年5月より奨励研究員として自身の研究課題に取り組みつつ、東洋文庫の研究事業、とくに前近代中国研究班の研究活動に参画してきた。2026年4月より聖心女子大学現代教養学部専任講師に就任。

・原 瑠美

2014年度より研究部臨時職員として事務補佐の業務に従事しつつ、前近代中国研究班の研究活動に参画し、『中国社会経済法制史用語解』の編集作業に取り組んできた。2026年4月より東京医科大学教育 IR センター助教に就任。

・徳永 佳晃

2018年度より研究協力者として現代イスラーム研究班の研究活動に参画してきた。2026年4月より広島大学大学院人間社会科学研究科助教に就任。

研究者として自立した者、および研究者としての自立に向けて支援中の者を一覧表化すると、下記のとおり。

研究者として自立した者	2024 年度	2025 年度
東洋文庫で正職員に採用した者*1	1	0
他の大学等研究機関で研究職に就いた者*2	1	4
合計(人)	2	4

*1 2024 年度の 1 名は嘱託職員からの採用。

*2 2024 年度の 1 名は研究協力者、2025 年度の 4 名のうち、1 名は嘱託研究員、1 名は奨励研究員、1 名は臨時職員、1 名は研究協力者。

研究者としての自立に向けて支援中の者	2024 年度	2025 年度
嘱託研究員	3	4
奨励研究員	7	7
日本学術振興会特別研究員 PD*3	0	0
うち科研費応募者*4	(1)	(3)
科研費採択者*4	(3)	(2)
海外協定機関との交流等を支援した者*5	(1)	(0)
合計(人)	10	11

*3 2024 年度は応募者なし。2023 年度に受け入れた 1 名は受入研究者の他機関への異動により異動した。

*4 2024 年度は 1 名が応募して不採択となり、他機関からの移管で 1 名を受け入れ、他 2 名が継続。2025 年度は 3 名が応募して不採択となり、他 2 名が継続。

*5 横原研究奨励金（海外協定機関での調査等のための給付型奨励金）を給付。

Ⅱ. 資料収集・整理

図書部では、アジア基礎資料研究に取り組む各研究班と協力して、アジアの現状および歴史・文化に関する一次資料（写本、文書史料、刊本、地図、統計、調査記録等）、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の充実に努めた。

収集した資料を速やかに整理して電子情報化することで、アジア学資料センターとしての機能強化を推進した。東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化をさらに推進し、オンライン検索サービスにより広く一般の利用に供するため、様々な言語に通じた司書・研究者・大学院生による書誌データの加工作業を継続した。

2015-2024 年度に続き、東洋文庫の所蔵資料のうち、和書・漢籍・洋書古典・近代初期洋書、絵画、考古資料等に対する悉皆調査を行い、専門家による和漢洋古典籍の保存修復を実施するとともに、書誌学・資料学の専門家の協力のもと調査・分析ならびに記録を行い、デジタル・アーカイヴに加工し、広範な利用目的に対応すべく継続的作業を行った。

以上の活動を推進するため、書誌学に通暁した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組んだ。

A. 資料購入

図書部では、超域アジア研究、アジア諸地域研究（「研究班と基礎資料研究テーマ」p.14を参照）において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区 分	決算額	和漢書	洋書	その他	計
総合アジア圏域研究	136,734	2	2	0	4
現代中国研究	292,879	15	0	0	15
現代イスラーム研究	1,464,457	2	279	0	281
東アジア研究	1,482,366	129	0	0	129
内陸アジア研究	599,331	34	3	0	37
インド・東南アジア研究	73,947	2	3 (1)	0	5 (1)
西アジア研究	440,007	0	58	0	58
共通（継続・大型資料）	18,678,106	1,015 (726)	132 (109)	1	1,148 (835)
合 計	23,167,827	1,199 (726)	477 (110)	1	1,677 (836)

※単位：決算額＝円

和漢書・洋書・その他・計＝冊（その他はUSBメモリ1点を1冊に換算）

※（ ）は、上記の冊数のうち雑誌の冊数。なお、洋雑誌のうち共通110冊は欧文雑誌。

主な購入図書

法國國家圖書館藏敦煌文獻

遼寧省博物館藏敦煌文獻

中國近代企業史資料彙編

中國近代醫療衛生資料匯編

舟曲民間古藏文苯教文獻

[Hong Kong / Canton] Nieuwe Pas=Caart Strekkende

van Pta Cataon tot Pta Lamtaon langs de kusten von Cochinchina, Tonquin, Quangsi en Quantung bewattende insgelyks het eiland Aynam en die van Macao met dieptens, havens en ankergronden... (広州・マカオ、コーチシナ新海図)

Versuch den Ursprung der Spielkarten, die Einführung des Leinenpapieres und den Anfang der Holzschneidekunst in Europa zu erforschen. Erster Theil, welcher die Spielkarten und das Leinenpapier enthält. (南シナ海・東インド諸島の新海図)

B. 資料交換

図書部では、国内外の各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈					寄 贈		
	和漢書	洋 書	アジア諸語	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	362 冊	121 冊	200 冊	0 件	683 冊	1,026 冊	614 冊	1,640 冊
定期刊行物	912 冊	66 冊	4 冊	0 件	982 冊	3,589 冊	450 冊	4,039 冊
計	1,274 冊	187 冊	204 冊	0 件	1,665 冊	4,615 冊	1,064 冊	5,679 冊

C. 図書・資料データ入力

図書部では、新収資料の書誌入力および所蔵資料の書誌データ整備作業を継続した。

2020 年度に永青文庫より寄託されたフランスの東洋学者アンリ・コルディエ (Henri Cordier 1849-1925) 旧蔵書を主体とする「コルディエ文庫」については、東洋文庫所蔵本との重複調査を一旦完了した。今後、さらに詳細を調査しつつ、近年中に文献解題を含む新たな目録の完成を目指す。

その他、東洋史学者で、モリソン文庫の将来以来、1934 年まで東洋文庫主事としてその運営に尽力した石田幹之助 (1891-1974) 旧宅の蔵



コルディエの蔵書であることを示す「高」の文字を箔押しした背表紙。



アンリ・コルディエ (Henri Cordier, 1849-1925)。75 歳の時に自身で作成したビブリオグラフィ、*Bibliographie des oeuvres de Henri Cordier* (パリ, 1924) の写真より。

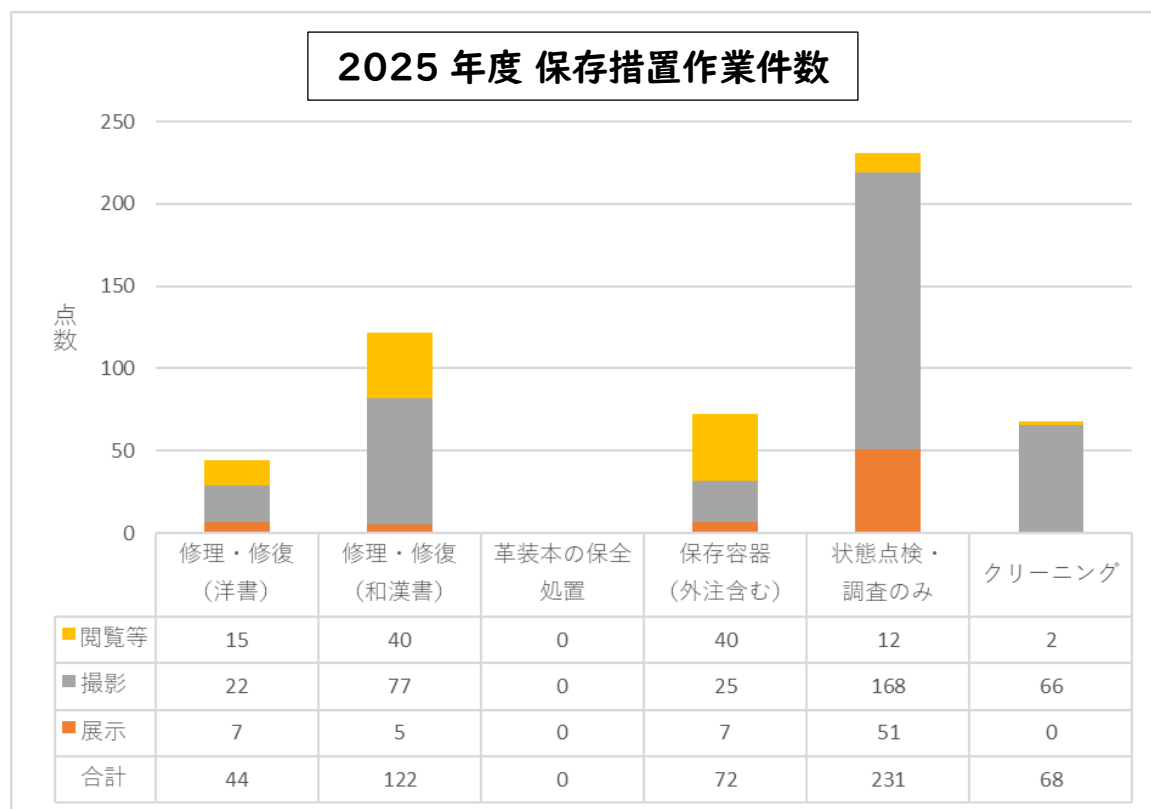
書について調査し、図書や書簡類等のアーカイブ資料をはじめ東洋文庫に所蔵すべき資料を選び出し、受入作業と具体的な調査を行った。書簡や写真、日記、稿本などを含む石田資料全体についても、近い将来の公刊をめざして目録化を進めている。

D. 資料保存整理

図書部が2025年4月1日-2026年3月31日の期間に実施した保存整理作業は、以下の通りである。

閲覧の前後、デジタル化のための撮影、およびミュージアムでの展示などにおける資料の状態を点検・調査した。撮影にあたっては、資料により補助具の作成など安全な手法を検討し、適宜撮影に立会い資料の取扱いの補助や折れ直しなどの応急処置を行った。クリーニングについては、主に撮影前にチベット大蔵經のドライクリーニングを定期的に行った。そのほか資料の状態と利用目的に応じて保存容器の作成や修復処置を行い、資料の保全に努めた。

100周年事業による外部委託修復として、『 sacramenta 提要』を含む洋書9冊の修復を行った。また国宝 古文尚書〈巻第三、第五、第十二〉ほか5件 美術工芸品保存修理事業を2024～2026年度の予定で、文化庁の国宝重要文化財等保存・活用事業費補助並びに東京都、文京区の補助を受け行っている。



Ⅲ. 資料研究成果発信

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)	第107巻第1-4号	A5判 4冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1752035411952		
2. 『東洋文庫欧文紀要』 (<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i>)	No.83	B5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1777536398757		
3. 『近代中国研究彙報』	第48号	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1777536691596		
4. 『東洋文庫書報』	第57号	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1777536878908		
5. <i>Modern Asian Studies Review</i> ／新たなアジア研究に向けて	Vol.17	オンラインジャーナル(公開済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1772591056904		
6. <i>Asian Research Trends New Series</i>	No.20	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1777537255909		

B. 論叢等出版

1. 『簡牘資料よりみる中国古代の国家と社会』	A5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1777539056736	
2 『清朝の史跡をめぐってIV: 中国東北篇2』	A4判 1冊(刊行済)
https://doi.org/10.24739/0002000884	
3. 『清朝『壇廟祭祀節次』訳注(三)―太廟・奉先殿・社稷壇(前半)―』	B5判 1冊(刊行済)
https://doi.org/10.24739/0002000885	
4. <i>Tatar Diaspora in Modern Eurasia: Connection, Transformation, Revolution</i> (TBRL26)	B5判 1冊(刊行済)
5. <i>Contracts, Litigation and their Norms Compared: Asian and Islamic Regions</i> (TBRL27)	B5判 1冊(刊行済)
https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1777539383831	

※URL は、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」の掲載アドレス(一部は公開準備中。ただし、B-4 の公開は情勢を考慮して当面見合わせる)。

IV. 普及活動

研究部では、アジア基礎資料研究の成果を一般に普及するため、研究員等による東洋学講座を前後 2 期に分けて全 6 回対面・オンラインの併用形式で実施した。また、著名な外国人研究者による特別講演会を開催した。従来の対面での講演会・シンポジウム等の開催に加えて、オンライン形式での開催を実施することで、遠方や海外在住者の参加が容易となり、より広範囲に研究成果を発信・普及することが可能となった。

普及展示部では、2024 年 12 月 27 日～2026 年 1 月 20 日にかけて、エントランスや展示室などの施設工事のためミュージアムを休館した。この工事により、多様な来館者にとってさらにアクセスしやすい施設となった。休館中は、ワークショップの実施により、幅広い層に東洋文庫と接する機会を設けた。

研究部・図書部では、書誌情報・研究情報を普及するため、毎月 DB 小委員会を開催して、協同して OPAC システム・東洋文庫リポジトリ ERNEST 等の管理・運営を行った。

東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化は、総冊数約 100 万冊の基本的な書誌データ部分の遡及入力を完了した。2021 年 1 月に NACSIS-CAT 準拠の OPAC システム「Toyo Bunko OPAC」をオンプレミス形式からクラウド形式に移行したことを受け、2023 年度より 5 年計画で、現行の書誌データベースの約 28 万件の書誌データを Toyo Bunko OPAC に移行する作業を進めている。この作業は書誌情報の発信力を高め、所蔵資料の国際的な活用範囲を拡大することに繋がり、ひいては、東洋文庫の資料情報センターおよびデジタルライブラリーとしての機能を強化していく上で重要な取り組みと言える。

漢籍については、伝統的な漢籍の書誌著録法が NACSIS-CAT との間に大きな乖離があり、かつ漢籍の横断検索システムとして、「全国漢籍データベース」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>) が広く利用されている現況に鑑み、当面 Toyo Bunko OPAC への移行は行わず、「全国漢籍データベース」との連携を目指すこととなった。「全国漢籍データベース」は東洋文庫の冊子体目録をもとに作成されたものである。これに対し、東洋文庫の漢籍データベースは、冊子体目録のデータを修正しつつ、その後の新収資料が加わっているため、両者のデータには差異がある。そこで「全国漢籍データベース」から提供された東洋文庫分データと、東洋文庫の漢籍データベースからダウンロードしたデータとを照合して、書誌情報に異同がある部分を洗い出し、データの修正・統合を行い、その上で、「全国漢籍データベース」のフォーマットに合わせて作成した漢籍データをもとに、東洋文庫独自の新「漢籍データベース」を構築する方針を立てた。分量が多いため、修正・統合作業には時間がかかる見込みで、2026 年度までに漢籍データの統合、リニューアル公開を目指す。

各部協同して、フランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン研究所、ロンドン大学 SOAS 図書館等協力協定機関およびその他の海外機関との学術交流や研究情報の国際発信を促進した。

A.研究情報普及

1. 東洋学講座

研究部では、近年の研究成果を一般に向けて広く普及するため、前期・後期の東洋学講座を開催した。すべて対面・オンラインの併用での開催とした。

(前期) テーマ: 「トランプ第2期政権の4年間と中東の政治的変動」

第1回(通算第600回)

日時: 2025年6月6日(金)

講演者: 鈴木 均氏(東洋文庫研究員)

題目: 「トランプ政権の発足とイランの政治的対応」

第2回(通算第601回)

日時: 2025年6月20日(金)

講演者: 湯浅 剛氏(東洋文庫研究員、上智大学外国語学部教授)

題目: 「近年のロシアと中東・イスラーム諸国関係: トルコ、イランとの外交を中心に」

第3回(通算第602回)

日時: 2025年7月4日(金)

講演者: 鈴木 恵美氏(東洋文庫研究員、中央大学文学部教授)

題目: 「アラブ『盟主』エジプトの変容: 中東和平交渉を巡る役割を中心に」

(後期) テーマ: 「中国というダイナミズム: 歴史・外交・経済から迫る」

第1回(通算第603回)

日時: 2025年11月14日(金)

講演者: 中村 元哉氏(東洋文庫研究員、東京大学大学院教授)

題目: 「歴史的視点はどこまで有効か——中華民国史から中華人民共和国史を読み解く」

第2回(通算第604回)

日時: 2025年11月21日(金)

講演者: 青山 瑠妙氏(東洋文庫研究員、早稲田大学大学院教授)

題目: 「揺らぐ世界秩序と中国の選択」

第3回(通算第605回)

日時: 2025年12月5日(金)

講演者: 峰 毅氏(東洋文庫研究員、東京大学経済学博士)

題目: 「中国セメント工業発展のダイナミズム」

2. 公開講座・公開研究会

研究部では、東洋文庫の所蔵資料や研究活動・研究成果をテーマとして、国内外の当該分野の著名研究者を招いて実施した(以下、開催日順で記載)。

2025年11月1日(土)専修大学-(財)東亜細亜文化財研究院学術交流協定締結10周年記念合同学術シンポジウム「加耶の港市と日本列島—昌原石洞遺跡を中心に」

共催:日本:専修大学大学院文学研究科、東洋文庫／韓国:東亜細亜文化財研究院
《プログラム》

開会

李海銖(東亜細亜文化財研究院)「昌原石洞遺跡の行動と特徴」

金鎮(東亜細亜文化財研究院)「昌原石洞遺跡の編年と段階的变化様相に対する検討」

丹治朱音(専修大学)「日韓における長期保有・「伝世」鏡の諸問題」

崔景圭(東亜細亜文化財研究院)「加耶の港市と昌原石洞遺跡」

小林孝秀(専修大学)「日本列島における古墳時代の港市」

閉会

2025年11月22日(土)・23日(日)国際シンポジウム「近代中国の史学変革と欧米・日本」

主催:東洋文庫、科学研究費・基盤研究(C)「清末民国初期における「史学空間」の構造と日本・西洋—複眼的視野による解明—」(24K03437 研究代表者 陶徳民)

《プログラム》

11月22日(土)

開会の部 司会 竹元規人(福岡教育大学)

趣旨説明 陶 徳民(東洋文庫)

挨拶 濱下武志(東洋文庫研究部長)【オンライン】

第一セッション 司会 陶 徳民

基調報告1 葛兆光(復旦大学)「「民族は一元に由来し、地域は以前から統一されていた」?——歴史の中の「中国」に関する思想論争」

基調報告2 桑兵(浙江大学)【オンライン】「西学・東学・中学の相互作用のもとでの中国史の研究と叙述」

胡逢祥(華東師範大学)【オンライン】「中国語訳日本書籍とマルクス主義史学の中国における初期の伝播」

質疑応答

第二セッション 司会 張仲民(復旦大学)

李孝遷(華東師範大学)「『満洲建国溯源史略』の前世と転生」

周文玖(北京師範大学)「中国の史学史研究と中国・日本間の史学交流」

陶徳民「文化交渉の視野から見た近代中国と日本の史学における相互影響——重野安繹『大日本維新史』と内藤湖南『章実斎先生年譜』を例として」

第三セッション 司会 竹元規人

張仲民「孫徳謙と『章氏遺書』の編修」

王思雨(復旦大学)「伝から伝稿へ——張爾田による清代后妃伝編纂の実践と史学的関心」

総合討論 司会 葛兆光

11月23日(日)

第四セッション 司会 武藤秀太郎(新潟大学)

基調報告3 吉澤誠一郎(東京大学)「中国社会経済史研究の二つの源流」

基調報告4 王汎森(台湾・中央研究院)【オンライン】「中国近代史学のドイツ・日本思想における起源——1920年代の梁啓超を例として」

潘光哲(中央研究院)【オンライン】「史学史の記述は史学観念の変化と史学知識の増進に重点を置くべし——現代中国の史学実践の回顧と反省」

陳建守(中央研究院)【オンライン】「忘れられた書物:梁啓超・松平康国と『世界近世史』」

質疑応答

第五セッション 司会 李孝遷

武藤秀太郎「中国におけるマルクス主義史学の受容と日本——河上肇を手がかりに」

竹元規人「文化、科学と史学:新文化運動期における学問の布置をめぐって」

顧少華(上海師範大学)「今夕はいずれの時ぞ:「現在」感覚と中国「近代史」の形成」

総合討論 司会 吉澤誠一郎

閉会の部 司会 竹元規人

閉会挨拶 葛兆光;吉澤誠一郎;陶徳民

2025年11月28日(金)フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題:「敦煌石窟薬師経変の図像と題記」

講師:濱田瑞美(横浜美術大学教授)

2025年11月29日(土)イスラーム地域研究・若手研究者の会設立50周年シンポジウム

「イスラーム国家論・イスラーム地域研究の現在地」

共催:東京大学中東地域研究センター、東洋文庫

《プログラム》

開会の辞・趣旨説明・三浦徹氏(東洋文庫研究員)

基調講演・小松久男氏(東洋文庫研究員)

「イスラーム国家論研究会:草創期を振り返って」

報告①・近藤文哉氏(日本学術振興会特別研究員PD・明治大学)

「エジプトの預言者・聖者祭におけるイスラームの布置」

報告②・徳永佳晃氏(日本学術振興会特別研究員PD・日本大学)

「隙間産業としてのイラン近代法制度研究」

報告③・山本沙希氏(高知大学講師)

「〈ムスリム女性〉の身体処遇とフェミニスト・アプローチ」

報告④・中島咲寧氏(日本学術振興会特別研究員DCI・京都大学)

「インド洋海域世界におけるムスリムの移動とその歴史的連続性」
報告⑤・平山草太氏(日本学術振興会特別研究員PD・東京大学)

「西アフリカ・イスラーム研究における〈身体化〉の諸問題」
総評・清水和裕氏(九州大学教授)

閉会の辞

2025年11月29日(土)・30日(日)

The Twelfth International Symposium of Inter-Asia Research Networks
Commemorating the Digitization Project of the Tibetan Manuscript Kanjur
“Rediscovering the Buddhist Canon from Multiple Perspectives”

《プログラム》

November 29 (Sat.)

Welcome Address: HAMASHITA Takeshi (Research Dept., Toyo Bunko)

Opening Remarks: YOSHIMIZU Chizuko (Tibetan Studies Group, Toyo Bunko)

Keynote Speech

Jonathan SILK (Leiden University)

The Development of Kanjur Studies “East” and “West”

TAKATA Tokio (Library Department Head, Toyo Bunko)

Dunhuang Chinese Residents and the Copying of Sūtras during the Tibetan Occupation

AITANI Yoshimitsu (Toyo Bunko)

Integration of Bibliographical Studies and Digital Archives: Towards Establishing a Hub for Buddhist Digital Library

NAKAMURA Satoru (University of Tokyo)

Technical Implementation of Digital Systems for Historical Materials: Experiences from Toyo Bunko’s Database Projects

November 30 (Sun.)

Markus VIEHBECK (University of Vienna)

Sūtra Collections in the Himalayan Borderlands: Local Manuscripts of an Early Tibetan Canonical Model

Christian LUCZANITS (SOAS, University of London)

Illuminated Tokzung Manuscripts from Mustang

YAO Fumi (University of Tokyo)

The Vinayapiṭaka of the Mūlasarvāstivādins, Its Embedded Sūtras, and the Lost Sūtrapiṭaka

SHŌJI Fumio (Risshō University)

The Prajñāpāramitā Sūtras in the Toyo Bunko Manuscript Kanjur: Distinctive Features and Their Significance in the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā

MIYAZAKI Tenshō (Tsurumi University, Toyo Bunko)

Evidence in the Margins: How Kawaguchi Ekai Used the Tibetan Kangyurs for His Japanese Translations

Discussion

Commentator: SAITO Akira (International College of Postgraduate Buddhist Studies)

Closing Remarks

2025年12月7日(日)シンポジウム「20世紀日本の中国調査」

主催:東洋文庫近代中国研究班

《プログラム》

報告

久保亨「20世紀日本の中国調査:概観」(兼 趣旨説明)

相原佳之「日本による中国桐材の輸入調査」

浅田進史「20世紀前半ドイツ商社の中国情報」

古泉達矢「第一次世界大戦時期の在華宣教師」

佐藤仁史「大同学院学生の東北農村調査」(On line)

高田幸男「上海自然科学研究所の調査研究」

瀧下彩子「満洲における日本酒醸造業調査」

田中比呂志「神田正雄の四川調査」

富澤芳亜「海南島における鉱産調査と開発」

弁納オー「戦中期漢口日本商工会議所の調査」

松重充浩「『満洲評論』掲載の華中・華南調査と現地認識」

山本真「日本軍による華南占領とその現地認識」

吉澤誠一郎「蚕糸業同業組合中央会の中国調査」

吉田建一郎「民国期中国の道路建設調査」

コメント

上田貴子・柳沢遊

2026年2月14日(土)・15日(日)「2025年度中央アジア史研究セミナー」

共催:AA研基幹研究「記憶」のフィールド・アーカイビング:イスラームがつなぐ共生社会の動態の解明」、中央ユーラシア研究会、東京外国語大学中央アジア専攻、東洋文庫中央アジア研究班、科学研究費・基盤研究(C) 24K04262

《プログラム》

2月14日(土)

自己紹介およびガイダンス 野田仁(AA研)

特別講演「中央アジア近代史の構想に向けて」

小松久男(東京大学名誉教授;東洋文庫研究員)

セミナー1「ペルシア語叙述史料」(前半)

木村暁(東京外国語大学総合国際学研究院)

2月15日(日)

セミナー1(後半)

セミナー2「テュルク語定期刊行物」

島田志津夫(東京外国語大学総合国際学研究院)

セミナー3「非現地語史料について(ロシア語史料読解を中心に)」

野田仁(AA研)

2026年2月20日(金)総合アジア圏域研究班による講演会

演題:「北朝隋代墓誌の整理と研究の全貌——拙著『新編北朝隋代墓誌所在総合目録』に基づいて」

講師:梶山智史(南開大学歴史学院副教授)

司会:氣賀澤保規(東洋文庫研究員、元明治大学文学部教授)

2026年2月28日(土)「2025年度 東洋文庫データベース会議」

《プログラム》

開会:趣旨説明

デジタル人文学セミナー 第1回「デジタル人文学の全体像」

中村 覚(東京大学史料編纂所助教)

データベース事例報告

「ヴェラム文書総合データベース」

三浦徹、佐藤健太郎、原山隆広(東洋文庫西アジア研究班研究員)

3. 特別講演会

研究部では、東洋文庫研究員、研究班の主催によって、主として来日中の著名な外国人研究者を招いて実施した。

2025年5月22日(木)英文による成果発信支援セミナー

講師:Dr. Paul H. Kratoska(元シンガポール国立大学出版局出版部長)

2025年6月23日(月)フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題:The Fanwang jing (Bonmō kyō 梵網經): A fabulous and perplexing scripture which founded East Asian Mahāyāna precepts

講師：船山徹（京都大学人文科学研究所教授）

2025年9月20日（土）シャリーアと近代研究会「近代におけるシャリーアと西洋法」講演会

主催：科学研究費・基盤研究（B）「中東における協働・共有の法制と実態：組合と財産共有」（23K25445 研究代表者 大河原知樹）

共催：東洋文庫、東北大学大学院国際文化研究科
《プログラム》

開会あいさつ 大河原知樹（東北大学大学院国際文化研究科）

講演：“Coexistence of Ottoman and Austrian private law: The creation of a mixed legal system in Bosnia and Herzegovina at the turn of the 20th century”

Mehmed Becic (Associate Professor, Faculty of Law, University of Sarajevo)

コメントおよび質疑応答

コメンテーター：伊藤知義（中央大学法科大学院教授）

2025年9月26日（金）フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題：「初唐佛頭中唐佛身—試論莫高窟「北大像」(96) 的兩次成像經緯」

講師：梅林（広州美術学院教授）

2025年10月9日（木）フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題：「從文明互鑒角度看莫高窟第249窟窟頂壁畫中的西亞—波斯影響」

講師：張元林（敦煌研究院教授、副院長）

2025年10月16日（木）フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題：Towards a Social and Cultural History of Geographical Knowledge: Evidence from Dunhuang

講師：Alexis Lycas [黎康]（高等研究実習院准教授）

2025年11月20日（木）フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題：Subjugation (Chōbuku 調伏): The Rite of Turning the Dharma Wheel (Tenpōrin hō 転法輪法) and the Construction of Japan as a Kami-Buddhist Multiverse

講師：Brian Ruppert（神奈川大学教授）

2025年11月24日（月）第3回シルクロード仏教文化研究会Buddhist Art and Cultural

Heritage in Nepal and the Tarim Basin（ネパールと西域の仏教美術と文化財保存）

主催：シルクロード仏教文化研究会、東洋文庫

共催: Dunhuang Foundation、科学研究費・国際共同研究加速基金(海外連携研究)「中央アジアの「ストゥッコ」像製作技法材料の総合的研究」(23KK0008)、同・特別研究員奨励費「絵画材料から見るシルクロードの仏教と交易—西域仏教壁画を手掛かりに」(23KJ2235)

《プログラム》

Opening Remarks

Depicting an Ideal Buddhist Realm: Textual and Visual Perspectives on Khotanese Buddhism

Erika Forte (Kyoto University)

Researching Monastery Collections in Mustang: Background, Procedures and Discoveries

Christian Luczanits (SOAS, University of London)

Endangered Buddhist Manuscript Traditions in the Nepalese-Tibetan Borderlands – With a Screening of the Documentary Resounding the Buddha's Sūtras

Markus Viehbeck (University of Vienna)

Round Table (Open Discussion)

Commentator: Iuchi Maho (Kyoto University)

Closing Remarks

2026年1月16日(金) フランス国立極東学院・東洋文庫共催研究会

演題: 「『修禪要訣』諸本の研究」

講師: 程正(駒澤大学教授)

4. 100周年記念事業シンポジウム・連続講演会

研究部では、100周年記念事業として、下記のシンポジウム、講演会を実施した。

2025年4月10日(木) 東洋文庫100周年記念連続講演会(第6回)

演題: 「れんがを積み土を固めて国土を再構築する—私の南宋史研究の回顧と反省—」

報告者: 黄寛重(東洋文庫名誉研究員、台湾中央研究院歴史語言研究所兼任研究員)

司会: 濱下武志(東洋文庫研究員)

通訳: 妹尾達彦(東洋文庫研究員)

2025年8月23日(土) 東洋文庫100周年記念連続講演会(第7回)

協力: 中央アジア研究班(内陸アジア出土古文献研究会)

演題: 「日本蔵敦煌文献の真偽に関する調査——国立国会図書館・大谷大学図書館を中心に」

講師: 張涌泉(浙江大学文科資深教授、中国文字学会副会長、浙江省語言学会会長)

司会・通訳：岩本篤志（立正大学教授、東洋文庫研究員）

2025年9月6日（土）東洋文庫100周年記念連続講演会（第8回）

演題：Qalamos and Writing: Notes on the Cultural and Linguistic History of the Pen, with a Focus on Central Asia

講師：ペーター・ツィーメ（東洋文庫名誉研究員、ベルリン・ブランデンブルク科学人文アカデミー首席研究員）

司会：松井太（大阪大学大学院教授、東洋文庫研究員）

2026年2月12日（木）東洋文庫100周年記念連続講演会（第9回）

演題：Asian Regions in the Toyo Bunko & Development Organizations: From Historical Research to Contemporary Policy Focal Points

講師：ロイ・ビン・ウォン（カリフォルニア大学ロサンゼルス校研究特別教授）

司会：リンダ・グローブ（東洋文庫研究員）

2026年2月26日（木）東洋文庫100周年記念連続講演会（第10回）

演題：「雲崗石窟をアジア文明の結晶物と評価した男——木下杢太郎『大同石佛寺』に関する考察——」

講師：周閔（北京語言大学教授）

司会：陶徳民（東洋文庫研究員）

2026年3月27日（金）東洋文庫100周年記念連続講演会（第11回）

演題：Post-Soviet Studies on Old Turkic Runic Inscriptions from Mongolia

講師：メフメト・オルメズ（イスタンブール大学教授）

司会：梅村坦（東洋文庫研究員）

5. 東洋文庫談話会

専門分野の若手研究者による成果報告会として、東洋文庫談話会を開催した。

2026年3月7日（土）

速水 大 氏（東洋文庫奨励研究員）

「『李訓墓誌』と唐開元時代の官僚グループ——阿倍仲麻呂・吉備真備を取り巻く状況」

司会：氣賀澤 保規 氏（東洋文庫研究員）

魏 郁欣 氏（東洋文庫奨励研究員）

「『江湖術士』像の検討——明清時代における風水師の一側面」

司会：山本 英史 氏（東洋文庫研究員）

河野 敦史 氏(東洋文庫奨励研究員)

「史資料に見える回部王公に関連する歴史叙述について」

司会:新免 康 氏(東洋文庫研究員、中央大学教授)

6. ミュージアムによる公開講座・イベント

普及展示部では、休館中および2026年1月21日開幕のミュージアム企画展に関連して、下記の講演会、ワークショップを開催した。

<講演会>

①「旅行家イブラヒムとその時代ーイスラーム世界と日本」

開催日:2026年2月7日(土)

講師:小松久男(東京大学名誉教授・東洋文庫研究員)

②「ジョン・セーリスの航海日記とイギリス船初の日本への航海」

開催日:2026年3月1日(日)

講師:タイモン・スクリーチ(国際日本文化研究センター教授)

<ワークショップ>

①『見て!歩いて!古地図を楽しもうー一丁倫敦と呼ばれた丸の内〜』

開催日:2025年6月2日(月)

講師:中村佳史(株式会社HUMIコンサルティング代表)

②『東洋文庫で学ぶヨガと栄養〜美味しく整う癒しのひととき〜』

開催日:2025年9月20日(土)

講師:中村瑞穂(ピラティス・ヨガインストラクター)

③『見て!歩いて!古地図を楽しもう〜再興された千川上水〜』

開催日:2025年11月29日(土)

講師:中村佳史(株式会社HUMIコンサルティング代表)

7. 研究情報の普及

研究部・図書部では、書誌情報・研究情報を普及するため、毎月DB小委員会を開催して、協同してToyo Bunko OPACシステム(<https://opac.tbopac.com/>)、学術情報リポジトリ「ERNEST」(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>。利用統計は「I アジア基礎資料研究」p.25に既出)の管理・運営を行った。

また、Toyo Bunko OPACへの移行(2023~2027年度)が完了するまでの暫定措置として、従来の言語別・資料別の書誌データベースを統合し、2023年11月よりメインデータベース「東洋文庫図書・資料検索」としての運用を開始した。それぞれの利用統計は、次のとおり。なお集計にはいずれもGoogleアナリティクスを使用している。

2025 年度「東洋文庫図書・資料検索」利用統計

<https://www.toyo-bunko.org/is/isqueryinput.php>

年 月	訪問者数	1 日平均	検索数	1 日平均
2025 年 4 月	920	30.7	139,235	4,641
5 月	917	29.6	263,802	8,510
6 月	884	29.5	144,979	4,833
7 月	813	26.2	200,474	6,467
8 月	697	22.5	187,930	6,062
9 月	804	26.8	191,416	6,381
10 月	936	30.2	186,919	6,030
11 月	981	32.7	155,337	5,178
12 月	1,047	33.8	205,309	6,623
2026 年 1 月	988	31.9	153,960	4,966
2 月	920	32.9	132,605	4,736
3 月	1,067	34.4	139,204	4,490
合 計	10,974	30.1	2,101,170	5,757

2025 年度 Toyo Bunko OPAC 利用統計

<https://opac.tbopac.com/>

年 月	訪問者数	1 日平均	検索数	1 日平均
2025 年 4 月	164	5.5	323	11
5 月	152	4.9	255	8
6 月	165	5.5	299	10
7 月	149	4.8	262	8
8 月	157	5.1	304	10
9 月	187	6.2	353	12
10 月	172	5.5	343	11
11 月	283	9.4	492	16
12 月	405	13.1	629	20
2026 年 1 月	466	15.0	610	20
2 月	1,001	35.8	1,123	40
3 月	355	11.5	494	16
合 計	3,656	10.0	5,478	15

Toyo Bunko OPACは現在移行途中のため、利用者数は多くないが、今後、移行作業の進展とともに利用者数も増加していくものと予測している。

8. 参考情報提供

調査研究による研究成果をはじめ東洋文庫の活動全般に関する年次報告書を刊行した。

『東洋文庫年報』2024年度版

オンライン版（公開）

<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/records/2000918>

B. データベース公開

図書部が中心となり、アジア基礎資料研究に取り組む研究班・研究グループと協力して、洋装本漢籍等の書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図等の画像データのデジタル化を進めた。同時に、梅原考古資料の未公開部分のデジタル化公開に向けたメタデータ作成に取り組み、「日本之部 古墳時代 画像データベース」として公開した。

2021年1月にNACSIS-CAT準拠のOPACシステム「Toyo Bunko OPAC」をオンプレミス形式からクラウド形式に移行したことを受け、2023年度より5年計画で、現行の書誌データベースの約28万件の書誌データをToyo Bunko OPACに移行する計画を立案した。2025年度は、100周年記念事業として外注による遡及入力作業を進めるとともに、新着資料のOPAC・CiNiiへの登録を開始した。漢籍については、当面Toyo Bunko OPACへの移行は行わず、「全国漢籍データベース」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>)との連携に取り組む計画を立てた。2025年度は、漢籍データの整備がおおむね完了し、「東洋文庫漢籍データベース」のプロトタイプ版を構築し、動作確認等の検証作業を進めた。

C. 海外交流

各部協同して、フランス極東学院および台湾中央研究院（歴史言語研究所・近代史研究所）、ハーバード・エンチン研究所、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、ロンドン大学SOAS図書館、オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ東アジア文化研究センター、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所、国際テュルク・アカデミー、吉林師範大学満学研究院との学術交流を進め、資料情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。また、カザフスタン東洋学研究所との間で新たに学術交流協定を締結した。



ハーバード・エンチン研究所

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材の育成に共同で取り組んだ。

世界各地のアジア基礎資料研究に取り組む外国人研究者と協力して、対面、あるいはオンライン形式によって、国際シンポジウム・ワークショップ・研究会等を通じた国際学術交流を推進した。

V. 学術情報提供

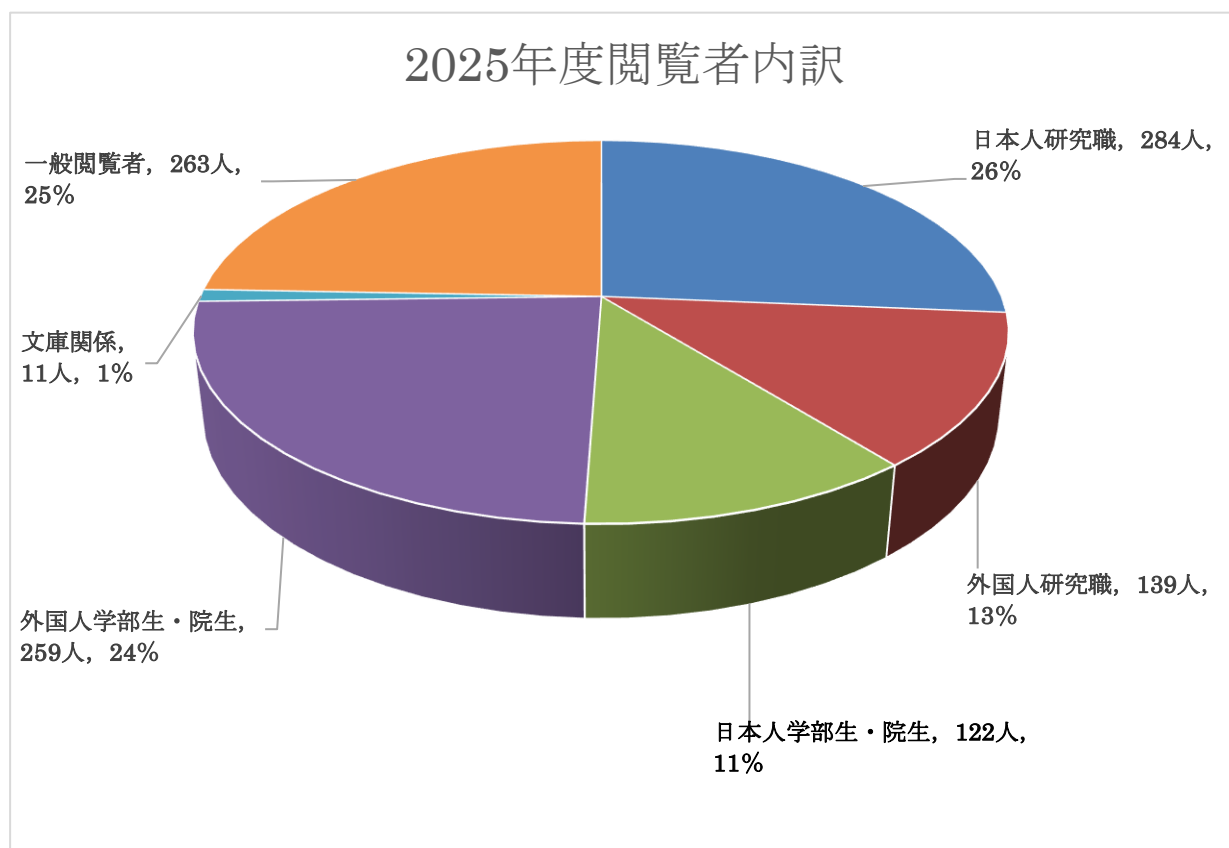
東洋文庫は、日本における東洋学にかかわる共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 図書・資料の閲覧（協力）サービス

図書部では、広く一般に開放された無料の閲覧室の運営を行った。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
研究員の書庫利用	22人	20人	24人	23人	31人	44人
閲覧者人数	53人	74人	79人	140人	125人	69人
閲覧図書数	2,656冊	3,192冊	2,193冊	10,408冊	9,958冊	2,002冊
レファレンス数	15件	20件	22件	38件	34件	19件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
13人	14人	17人	13人	19人	17人	257人
70人	68人	63人	91人	121人	125人	1,078人
2,186冊	1,565冊	1,357冊	1,759冊	1,911冊	2,581冊	41,768冊
19件	19件	17件	25件	33件	34件	295件



B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影齣数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
57	0	143	27

(2) 電子複写

申込件数	提供枚数
427	13,010

C. 情報提供サービス

研究部では、刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

普及展示部では、広く一般の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし（中学生程度の歴史知識を前提）、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期している。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

2026年1月21日より、ミュージアムで下記の展覧会を開催し、図録を発行した。本展示から従来よりも初見の来館者が東洋文庫を理解しやすいよう平常展を構成している。

〈企画展〉

『ニッポン再発見－異邦人のまなざし』

会期：2026年1月21日（水）～5月17日（日）

入場者数：18,477人（2026年3月末現在）

〈平常展〉

「東洋文庫を知るための3つのキーワード」

「モリソン書庫へようこそ」

「東洋文庫の書物でひもとく世界の歴史」

5. 入場者数

2025年4月1日～2026年3月31日における、ミュージアム総入場者数は、以下のとおりである。

月	1月	2月	3月	合計
入場者数	2,771	7,217	8,489	18,477

E. 普及広報

普及展示部では、広報目的での東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、一般認知度を高めるためのメディアへの情報提供として、企画展内覧会の開催や広報物の発送、ホームページの随時更新、SNSでの告知などを積極的に行った。また、東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 報道実績

ミュージアムに関する報道実績の主なものを以下に挙げる。

雑誌、WEB：『別冊太陽』（平凡社）、『mitsubishi.com』、『マンスリーみつびし』など

2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして、『東洋見聞録』を発行・頒布した。

3. メールニュース

月初にメルマガを配信し、施設工事の進捗、ミュージアムのリニューアル・オープンの詳細、オンラインショップ情報、イベント情報のほか、各部の最新のお知らせを配信した。

4. そのほかの学習支援・普及活動

若年層を対象とした学習支援、普及活動に関する主な実績を以下に挙げる。

- ・2025年11月28日、筑波大学附属視覚特別支援学校中学3年生2名の職場体験の受け入れを行った。
- ・2026年2月10日・17日に広尾学園小石川中学校3年生153名の見学会を実施した。同校高等部と東洋文庫はパートナーシップを締結している。

5. 東洋文庫アカデミア

東洋に関する歴史、文学、美術、音楽、宗教、政治、経済、文化、社会、語学、図書館学、博物学等の広い分野を対象として、東洋文庫の持つ、図書・研究・普及の活動を総合し、一般向けの生涯学習講座「東洋文庫アカデミア」を実施し、ベテラン研究員による研究成果の普及とともに、若手研究者が講師経験を積む場として活用した。

開講講座は下記のとおり(表中の人数は、延べ参加人数を記した。*印を付したものは継続中の講座の2026年3月31日までの延べ参加人数である)。

講座名	講師(所属)	期間	回数	人数
ドラマで知る朝鮮王朝の歴史 ※対面開催	呉成浩(オ・ソンホ、コリア社会歴史ライター)	2025年2月12日 ～2025年7月9日	6	31
書道入門(初級) ※対面開催	神野雄二(大光)(熊本大学名誉教授・全国大学書道学会副会長・NHK学園オープンスクール書道講師)	2025年4月4日 ～2025年7月18日	8	51
歴史とは何かー日本の世界史教育の問題点を考えるー ※対面・オンライン開催	宮脇淳子(東洋文庫研究員)	2025年4月12日 ～2025年6月21日	6	174
菱川師宣の『美人絵づくし』を読む ※対面開催	深沢真二(東洋文庫研究員。元・和光大学表現学部教授)	2025年5月9日 ～2025年6月6日	5	20
漢字の変遷から観る漢人社会史 ※対面・オンライン開催	濱島敦俊(東洋文庫研究員、大阪大学名誉教授、東京大学文学博士(歴史学領域)・国立民族学博物館学術博士(人類学・民俗学領域))	2025年5月31日 ～2025年7月26日	3	38
学習マンガのひみつーその過去と未来、メディアとしての可能性ー ※対面開催	伊藤遊(京都精華大学国際マンガ研究センター研究員)、山中千恵(京都産業大学現代社会学部現代社会学科教授)、瀧下彩子(東洋文庫研究員)	2025年9月6日	2	28
漢字の変遷から観る漢人社会史(2) ※対面・オンライン開催	濱島敦俊(前掲)	2025年9月27日 ～2025年7月26日	3	29
イランの芸術 ペルシア書道に親しむ「シャーナーメ(王書)」	角田ひさ子(イラン文化センター講師)	2025年10月10日 ～2025年12月19日	6	60

※対面開催				
始めてみよう水墨画（水辺の小動物を描く） ※対面開催	伊藤忠綱（二松学舎大学、 日本大学非常勤講師）	2025年10月8日 ～2026年1月14日	6	47
書道の魅力—歴史・鑑賞・技法— ※対面開催	神野 雄二（大光）（熊本大学 名誉教授・全国大学書道学会副会長・NHK 学園 オープンスクール書道講師）	2026年1月9日 ～2026年5月1日	3	6*
ペルシア絵画入門：『シャー・ナーメ』写本挿絵を楽しむ ※対面開催	本間美紀（東洋文庫研究員）	2026年1月16日 ～2026年3月13日	3	32
始めてみよう水墨画（植物画「四君子」を描く） ※対面開催	伊藤忠綱（二松学舎大学、 日本大学非常勤講師）	2026年2月4日 ～2026年4月15日	6	62*

F. 国際交流

東洋文庫は、フランス国立極東学院および中央研究院の歴史語言研究所・近代史研究所（台湾）、ハーバード・エンチン研究所（アメリカ）、アレキサンドリア図書館（エジプト）、イラン議会図書館、ロンドン大学SOAS図書館（イギリス）、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所（ドイツ）、国際テュルク・アカデミー、カザフスタン東洋学研究所（カザフスタン）、吉林師範大学満学研究院（中国）、オックスフォード大学セントアンズ・カレッジ東アジア文化研究センターと協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進した。

G. 研究者の交流および便宜供与のサービス

Ⅰ. 長期受入

(Ⅰ) 外国人研究員の受入

コスタンティーノ・モレッティ（フランス国立極東学院 東京支部長）

「仏教の文物とそれを支える物質：中世中国・日本における仏教の生成と普及」

（2024年9月1日～2026年8月31日）

Kamarid, Dörte（国際仏教学大学院大学仏教学部研究員、JSPS外国人特別研究員）

「パツァプニマタク著『根本中論注釈』—Ⅱ世紀カシミールとチベットにおける学問形成」

（2025年4月1日～2027年3月31日）

〔受入研究員：吉水 千鶴子〕

ガザンジェ（青海民族大学民族学与社会学学院副教授）

「近代日本の探検者などの記録における中国西部地域の社会文化に関する文献整理」

（2025年5月27日～6月7日、2026年1月26日～2月8日）

〔受入研究員：濱下 武志〕

(2) 外来研究員の受入

林幸司(成城大学経済学部 経済学科 教授)

「近代中国における「銀行家」の国際的展開に関する研究」

(2025年4月1日～9月30日)

[受入研究員:中兼 和津次]

(3) 2025 年度奨励研究員の任用

・中塚 亮[継続] ※2019～2021 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。2022 年度より科学研究費基盤研究(C)「図像資料から見る『封神演義』の受容と展開」の研究課題に取り組んだ。

・多々良圭介[継続] ※2019～2021 年度斯波研究奨励金受給者

※2022～2024 年度槇原研究奨励金受給者

研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。2022 年度より科学研究費基盤研究(C)「19 世紀末～20 世紀初中国の感染症流行の構造解析—感染症流行年表の制作を中心に—」の研究課題に取り組んだ。

・魏 郁欣[継続] ※2021～2023 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「明清時代における風水師とその活動についての社会史的研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。

・速水 大[継続] ※2021～2023 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「敦煌吐魯番出土文献と唐代均田制」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに中央アジア研究班の研究活動に参画した。

・河野 敦史[継続] ※2023～2025 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「現代ウイグル語訳『ターリーヒ・ハミーディー』の「序章」に見られる歴史叙述に関する検討—現代ウイグル語資料の活用促進に向けて—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代ウイグル語図書資料の整理とデータベース化作業に参画した。

・島田 大輔[継続] ※2024～2025 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「天津租界の日本語雑誌『日華公論』に関する基礎的研究—「日華文化提携」の実相—」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに現代中国研究班の研究活動に参画した。

・鈴木 航[継続] ※2024～2025 年度斯波研究奨励金受給者

研究課題「国民政府期中国におけるメディア空間の拡大」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに近代中国研究班の研究活動に参画した。

※奨励研究員の任期は、3 カ年度以内。3 カ年度の受入期間終了後は、1 カ年度ずつ、最大 3 回まで更新可。

※斯波研究奨励金・榎原研究奨励金の給付期間はそれぞれ1年間。選考委員会による延長審査に合格した場合は、1年間ずつ、最大3年間まで給付期間が延長される。

(4)「斯波研究奨励金」の給付

2018年度に斯波義信文庫長(当時)のご寄付によって設立した特定資産「斯波研究奨励基金」と「斯波研究奨励金制度」により、2025年度、東洋文庫奨励研究員を対象に募集・選考を行い、3名(延長1回目2名、延長2回目1名)に対して研究奨励金年額各50万円を給付した。

(5)「榎原研究奨励金」の給付

2022年2月、第12代理事長榎原稔氏(1930~2020)のご遺族からの寄付金を基金化して特定資産「榎原研究奨励基金」を設立した。これを発足原資として、ハーバード・エンチン研究所をはじめ、東洋文庫と学術交流協定を締結する海外研究機関が取り組む「ビジュアル資料の保存・デジタル化・展示・公開・研究活用と、若手研究者の育成、および国際交流事業の推進」を目的に、給付型奨励金「榎原研究奨励金制度」を導入した。2025年度は、東洋文庫の奨励研究員、研究部運営委員、ハーバード・エンチン研究所関係者に周知し、東洋文庫研究員1名に対してハーバード・エンチン研究所等との学術交流のため旅費(実費)として、研究奨励金1,079,605円を給付した。

2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行った。

Austria	Markus Viehbeck [University of Vienna教授]
	Bosna i Hercegovina
	Mehmed Becic [University of Sarajevo准教授]
China	呉冕[北京大学亜洲史地文献研究中心・助理研究員]
	張元林氏[敦煌研究院副院長](他1名)
	夏明方[中国人民大学清史研究所教授](他3名)
	周建波[北京大学教授]
	鮑璐[浙江大学研究生]
	葛兆光[復旦大学教授](他3名)
	李孝遷[華東師範大学教授(他1名)]
	周文玖[北京師範大学教授]
	顧少華[上海師範大学教授]
	張会芳[中国社会科学院近代史研究所・近史所副研究員, 革命史研究室副主任](他5名)
England	Christian Luczanits [SOAS, London University教授]
France	Dora Tauzin [日仏カルチュラタン協会会長]

German CRFF Oliver [Secretary General, PIAC] (他6名)
 Kazakhstan ABDILASHIM, Duisenghali [Gumilyov Eurasian National University]
 Farkhad ALEUSHINOV [Qazaq Historical Society] (他5名)
 Korea 朴率喜 [国立世界文字博物館] (他3名)
 崔宰榮 [ソウル大学教授]
 Netherlands Jonathan Silk [Leiden University教授]
 Switzerland Léo Maillet [University of Geneva教授]
 Taiwan 翁誌聰 [台湾国家図書館副館長] (他2名)
 林果顯 [政治大学准教授]
 蘇聖雄 [中央研究院近代史研究所副研究員]
 劉龍心 [東吳大学歴史学系教授]
 雷祥麟 [中央研究院近代史研究所所長]
 周瑞坤 [国立台湾図書館企画推進課課長]
 陳怡宏 [国立台湾歴史博物館研究部長]
 USA Mary Lewine [Dunhuan Foundation]
 Jie Guo (郭劼) [University of South Carolina准教授]
 Uzbekistan Mustafayeva Nodira [Al-Beruniy Institute of Oriental Studies,
 Academy of Sciences of Republic of Uzbekistan教授] (他3名)

以 上

2025 年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫

理事長 宮 永 俊 一

2025年4月1日から2026年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業の概要は、下記の通りです。

事 業 内 容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 基盤研究(A)の対象事業

「書誌学とデジタルアーカイブの融合による仏典デジタルライブラリの拠点形成」

[研究代表者: 會谷 佳光]

(2025 年度採用、5 ヶ年・初年度)

2. 基盤研究(B)の対象事業

「インドシナ農村の社会経済構造から見る脱農化と帰農化の現代史」

[研究代表者: 高橋 昭雄]

(2022 年度採用、4 ヶ年・最終年度)

「連歌総目録の補完と新システムの構築に関する研究」

[研究代表者: 深沢 眞二]

(2023 年度採用、3 ヶ年・最終年度)

「幕末維新期の藩校漢学教育に関する総合的研究—近世近代を繋ぐ漢学教養の持続性を軸に」

[研究代表者: 朱 全安]

(2024 年度採用、4 ヶ年・第 2 年度)

3. 基盤研究(C)の対象事業

「人文情報学の手法によるイスラーム都市社会の人的ネットワークの研究」

[研究代表者: 三浦 徹]

(2022 年度採用、4 ヶ年・最終年度)

「1930～50 年代児童雑誌における「学習マンガ」ジャンルの形成に係る実証的研究」
[研究代表者：瀧下 彩子]
(2022 年度採用、4 ヶ年・最終年度)

「19 世紀末－20 世紀初中国の感染症流行の構造解析―感染症流行年表の制作を中心―」
[研究代表者：多々良圭介]
(2022 年度採用、4 ヶ年・最終年度)

「図像資料から見る『封神演義』の受容と展開」
[研究代表者：中塚 亮]
(2022 年度採用、4 ヶ年・最終年度)

「喪葬用文物よりみた、中国古代における死生観・冥界観の展開に関する基礎的研究」
[研究代表者：関尾 史郎]
(2024 年度採用、3 ヶ年・第 2 年度)

「清末民国初期における「史学空間」の構造と日本・西洋―複眼的視野による解明―」
[研究代表者：陶 徳民]
(2024 年度採用、3 ヶ年・第 2 年度)

4. 特別研究員奨励費の対象事業

「パツアプニマタク著『根本中論注釈』－11 世紀カシミールとチベットにおける学問形成」
[研究代表者：吉水千鶴子 研究分担者：ドルテ・カマリド]
(2025 年度採用、2 ヶ年・初年度)

B. 三菱財団研究助成による事業

1. 人文科学研究助成

「近現代ウイグル人社会における歴史叙述の変容：民族語文献からの検討」
[研究代表者：新免 康]
(2024 年 10 月より 1 年半)

「近代中央アジアにおけるジャディード運動の総合的研究」
[研究代表者：小松 久男]
(2024 年 10 月より 1 年)

以 上